

千葉教育

萩

令和2年度
No.663

千葉の子どもたちの未来のために

特集

道徳教育の充実に向けて

○シリーズ 現代の教育事情

麗澤大学大学院学校教育研究科道徳教育専攻准教授	鈴木 明雄
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官	浅見 哲也
県教育庁教育振興部学習指導課	
県立大多喜高等学校	

○提 言

株式会社BOOT BLACK JAPAN代表取締役社長	長谷川裕也
-----------------------------	-------



千葉県総合教育センター

学校自慢

「誰もが安心して暮らしていける街」への 小さな一歩

県立館山総合高等学校長 わたなべ 渡邊 よしゆき 嘉幸



1 はじめに

本校は、一年を通して温暖な房総半島南端の館山市に所在する、統合13年目を迎えた高校である。本校で展開される教育の淵源は、産業教育に長い歴史を刻んだ館山高校と安房水産高校にあり、以来、両校の伝統を継承、発展させ現在に至っている。このため、全日制に工業、商業、海洋、家政の4学科、定時制に単位制普通科、さらに大型船の船長・機関長を育てる専攻科を併設している。また、県立千葉大宮高校のスクーリング協力校としての指定も受け、県下有数の多様な学びを展開している。

2 特色ある実践活動

生徒が「実学によるスペシャリストへの道」を歩んでいく中で、各学科においては特色ある学びが展開されている。その数々の取組を縦横につなぎ始めたのが、平成30年度に家政科を中心に指定を受けた文部科学省のSPH（スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール）事業である。

「教科『家庭』の学びをコミュニティ再生に生かす地域共創人材育成プログラムの開発～地域の生活を支え、地域の賑わいを創り出す「まちカフェ」プロジェクトへの挑戦～」という研究開発課題を掲げてスタートし、3年目を迎えた今年度が最終年度にあたる。

その中心にある「まちカフェ」の運営では、人口減少や高齢化により危惧される地域社会の機能維持に資するため、「地域の子育て支援」「高齢期の生活の質の向上」「生活文化の伝承・創造」「減災に関する学習」を充実させることを目指している。また、運営に当たっては、次代の郷土を創る人材の育成や学校を

核とした街づくりを意識し、館山市や大学、NPO団体等と連携・協働している。

「まちカフェ」で行う4つのフィールドは「減災活動」「交流～乳幼児とその養育者、高齢者、支援を必要とした方々との交流～」「食のまちPR活動」「地域の魅力発信」であるが、多岐にわたる活動の中で、工業科と連携した“かまどベンチ”の製作や海洋科と連携した“食べるかつおのラー油缶詰”の製造、生存対策講習会の実施、商業科と連携したクイズ形式の“館山検定”の開発等を行った。



まちカフェ パウンドケーキ販売

3 おわりに

このような取組を進める中で、生徒は変容を遂げ、自分の想いを表現したり、初対面の人でも自然に声掛けをしたりするようになった。昨年度の被災の際には、館山市の支援も得て、手製の支援物資等を携えて災害の大きかった地域に入り、お年寄りの「声」を聴き、行政につなげる活動をした。

全学科が協力して館山駅前で開催した「まちカフェ」では多数の市民に会場していただき、生徒たちは「館総の防災・減災活動」が少しずつ広がり始めたことを実感している。

- ◆学校自慢 「誰もが安心して暮らしていける街」への小さな一歩 県立館山総合高等学校校長 渡邊 嘉幸
 ◆提言 危機を乗り越えられる人間 株式会社 BOOT BLACK JAPAN 代表取締役社長 長谷川裕也…2

シリーズ 現代の教育事情 道德教育の充実に向けて

- 主体的・対話的で深い学びができる生徒の育成～問題解決的な道德科によるカリキュラム・マネジメントの構築～
 麗澤大学大学院学校教育研究科道德教育専攻准教授 鈴木 明雄…4
 ■今、道德教育で求められていること 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 浅見 哲也…6
 ■「いのち」のつながりと輝き～千葉県における道德教育～ 県教育庁教育振興部学習指導課…8
 ■学校の教育活動全体で道德を～心の免疫力を高め、生徒も教職員も生き生きと～ 県立大多喜高等学校…10

私の教師道

- 学校を創る 平時の校長、有事の校長 浦安市立富岡小学校校長 勝田 秀樹…12
 ■学校を支える チーム・組織として進める学校運営 四街道市立旭中学校教頭 米元 賢志…14
 ■学校を動かす 「つなげる」「つながる」をテーマとして 県立仁戸名特別支援学校主幹教諭 高橋 敬子…16
 ■子供を知る コミュニケーションの大切さ 松戸市立六実小学校教諭 西川 琢麻…17
 ■子供を知る 初任者研修を通じて学んだこと 市川市立第四中学校教諭 山崎 浩之…17
 ■授業を創る 主体的に考え、互いに認め合う道德授業を目指して 睦沢町立睦沢小学校教諭 山内 ゆり…18
 ■授業を創る 一斉指導の中で有効なユニバーサルデザイン教育とは一板書とノート整理を中心にー 県立生浜高等学校教諭 上原 美和…20

活・研究 長期研修生からの報告

- 小学校編 見方・考え方を育て機能的に言語運用する語彙指導の研究ー継続した言葉の収集と個人文集作りを通してー
 木更津市立請西小学校教諭 迫田 直哉…22
 ■小学校編 道德的判断力を高める指導の工夫ー現代的な課題を取り上げた教材開発と授業実践を通してー
 香取市立小見川中央小学校教諭（前香取市立津宮小学校教諭） 大川 珠代…23
 ■中学校編 目的に応じて表現方法を選択できるようにするための「比例と反比例」の指導
 ー題材の精選、ふきだしの活用、伝え合う活動に着目してー
 流山市立南部中学校教諭（前流山市立常盤松中学校教諭） 浅沼 克俊…24
 ■高等学校編 高等学校における国際理解を視野に入れたアジアの諸民族の音楽についての教材化に関する研究
 ー生徒の実感を伴った音楽体験を目指してー
 県立茂原高等学校教諭（前県立千葉商業高等学校教諭） 岩上 真弓…25

ケーススタディ

- 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の導入と課題について 和洋女子大学特任教授 柴内 靖…26

保幼小の連携

- 幼児期から中学までを見通して子供を育てる「チーム日の出」の取組 浦安市立日の出幼稚園長 中島麻美子…28

教育の情報化

- 小学校プログラミング教育コンテンツの紹介～授業プラン6 3年国語「へんとつくり」～ 県総合教育センターカリキュラム開発部メディア教育担当…29

情報アラカルト

- 次世代を担う子供たちの育成を目指して ～新しくなった学力向上プラン～ 県教育庁教育振興部学習指導課…30
 ■県立関宿城博物館25周年記念企画展「関東のへそ～地勢とくらしのヒストリー～」 県立関宿城博物館…32
 ■千葉県児童生徒・教職員科学作品展から全国展へ 県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育担当…33

学校 NOW！

- 先進校の取組 道德教育を楽しむ 長生村立八積小学校…34
 ■学校歳時記 「個に応じる指導」と「個別最適化された学び」 千葉大学教育学部特任教授 天笠 茂…36
 ◆発信！特別支援教育 特別支援教育講演会のお知らせ「障害者とともに生きる」ー地域共生社会を目指してー 県総合教育センター特別支援教育部…38
 ◆千葉歴史の散歩道 印旛郡酒々井町周辺の初期荘園の遺跡 県教育庁教育振興部文化財課埋蔵文化財班長 木原 高弘

道 標

新型コロナウイルス感染症の脅威は、社会の仕組みや日常生活を一変させた。この一連の動きの中で、社会はいかにあるべきか、社会との関わりにおいて自己はいかにあるべきか、改めて考えた読者は多いであろう。

このような中、自らの人生や社会における、答えが定まっていなかった問いに対し、受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、よりよい社会と幸福な人生の創り手としての資質・能力を育むため、道德教育の果たす役割はますます大きくなっていると感じる。

これまで国は、道德教育の抜本的改善・充実に取り組み、平成30年度には、小学校の道德が教科化され「特別の教科 道德」となった。（中学校は令和

元年度から）

一方、県教育委員会においては、映像教材の作成や高等学校への「『道德』を学ぶ時間」の導入など全国に先がけて取り組むとともに、令和2年3月には、学習指導要領の改訂や義務教育における道德の教科化、第3期千葉県教育振興基本計画等を踏まえ、「千葉県道德教育推進のための基本的な方針」を改訂した。これらを受け、各学校においては、地域や学校の実態を踏まえながら、日々、道德教育の実践に努めているところであろう。本号では、これまでの実践の蓄積を振り返り、道德教育の現状を確認し、今後の一層の充実に向け、どのような取組が必要か考えていきたい。

危機を乗り越えられる人間

株式会社BOOT BLACK JAPAN 代表取締役社長

靴磨き職人 は せ が わ 長谷川 ゆうや 裕也



20歳の時に東京駅の路上で靴磨きを始めてから早いもので16年が経ちました。まだまだ職人としても経営者としても至らぬことが多く毎日が挑戦と学びの連続です。

現在は東京青山に2店舗、虎ノ門に1店舗、札幌に1店舗Brift Hという名前で靴磨き店を展開しています。

2017年にはロンドンで開催された第1回靴磨き世界大会で優勝し、世界チャンピオンにもなれました。それもあり、当店には世界中から革靴愛好家が集まります。また、海外に靴磨きを披露しに行ったり、靴磨き大会の審査員として招聘されたりと色々な活動をさせて頂いております。

今は自信を持ってこの仕事が天職だと言えますが、元々靴が好きで始めた仕事ではなく、偶然という名の必然によって出会うべくして出会った天職だと思っています。

【靴磨きとの出会い】

僕は千葉県の本更津市で生まれ育ちました。家は母子家庭で、母親が夜の仕事をしながら育ててくれました。小さい時から「高校を卒業したら働きなさい」と言われていたので、地元の高校を卒業して製鉄所に就職しました。仕事は楽しかったのですが、自分の人生がここで終わる気がしなかったのと、海外へ行きたいという想いが強かったので半年くらいで英会話学校に転職しました。

そこでの経験が強烈で、自分の人生の可能性をとてつもなく広げてくれました。仕事は

英会話学校の生徒の勧誘、教材の販売だったのですが、完全歩合制でコピー代一枚から自腹。やっただけ収入も増えるという仕事だったので壮絶に働きました。ただ1年半くらいで体調を崩し退職。悔し涙を流した初めての経験でした。

闘志漲る20歳の長谷川青年は日雇いのアルバイトをしながら就職活動をしていましたが、手元の資金が尽き、無一文状態になってしまいました。元手がかからなくてすぐに稼げる仕事はないか？そこで思いついて始めたのが靴磨きでした。100円ショップで靴磨き屋のセットを組みました、初期投資は500円。東京駅に朝8時に行き、夜10時まで磨きました。なんと初日から7千円も稼げました。そこからは靴磨きの仕事に惚れこみ没頭。師匠もいないので手探り、独学で靴磨きをマスターしていきました。23歳の時には路上に行列が出来るような靴磨き店となりました。

【靴磨き専門店を開く】

路上での靴磨きは許可が出ないため、ずっと無許可で営業していました。警察には毎日撤去され、泣く泣く4年弱の路上靴磨きを辞めざるをえない状況になってしまいました。その頃には「日本の足元に革命を！」をモットーに靴磨きで日本を元気にする！という気持ちで靴磨きをしていました。

路上で靴磨きをしていて感じていたのは“靴磨き職人の地位の低さ”“靴磨きというものの価値の低さ”でした。そこで世界一カッコ

いい靴磨き屋をやろうと思い、逆転の発想で高級靴磨き店“Brift H”を2008年に南青山に開店。スーツを着て、目の前でバーテンダーのように靴をパフォーマンス式に磨き上げるというスタイルを確立しました。

現在は職人が10名ほどいる靴磨き店として後進の育成に尽力しています。

【お客様に支持される職人とは】

正直、最初の10年間は自分がメディアに露出すること、お店の売上を上げることで精一杯でした。結果、そこそこまでは認知され売上も上がりましたが、会社としては自分がいなくてはならない脆弱な組織になっていました。そこで2年前に人を育成することを一番の仕事に変えました。

そこで改めて痛感したのは“教育”というものの大切さ、教えることの難しさです。

元来、職人の世界というものは「目で盗め!」「俺の背中を見て勉強しろ!」ということが多いのですが、それだと現代にあいません。丁寧に説明して、やらせて、チェックして、改善を繰り返す。人によってアドバイスの方法を変えたり、言い回しを理解しやすい言葉に変えたりもしました。教えることでこちらもたくさんの学びがあります。

靴磨きという技術は真剣に取り組めば半年もあれば身に付きます。最低限のレベルに達することが出来たとしても、そこからはその人それぞれの「考え方」によって大きな差が出てきます。一見すると単純作業に見える靴磨きですが、靴によって革の状態は様々です。どう磨いて仕上げるかで靴の表情も大きく変わります。濃くするのか? 艶は控え



めか? ピカピカか? 正解はお客様しか知りません。なのでただ靴磨きをするのではなく、しっかりとお客様と会話をして、職業、ライフスタイル、好みをしっかり聞いた上で一足の靴を最高に魅力的な状態にする。それが出来る職人こそが支持される職人なのです。

【コロナ時代に立ち向かう】

世の中の価値観が大きく変化する時が不意打ちできました。僕ら靴磨き職人を取り巻く環境もとても厳しいです。おうち時間が増えれば外に出かけないので靴は汚れないですし、対面での靴磨きを売りにしていた当店は大打撃を受けました。それはどんな仕事でも大きなダメージを受けたと思います。ただ、業種に限らず、この大きな変化をチャンスに変えることが出来るかどうか。真価が問われる時代とも言えると思います。ここで投げ出したら諦めたらゲーム終了です。僕らはこんな時だからこそ「足元を美しくして人生に輝きを与えよう!」をテーマに、コロナ前より精力的に活動をしています。ピンチが訪れたことで無駄なものが見えました。人の本質も、チャンスも見えました。未来はまだ見えませんが、間違いなく“前向き”“柔軟”“一生懸命”に働く人は益々進化すると思います。

困難が多い時、変化が大きな時こそ人間教育の真価が問われるのだと思います。学校というのはその点でとても大きな影響を与えます。ぜひとも教育にたずさわる皆様には教え子たちに愛情を持って真剣に接して頂けたら幸いです。その経験が世に出た時の糧になるはずで。学問よりも人生についての考え方の方がはるかに重要になるので、個人の可能性を最大限引き出して、これからも訪れる危機を乗り越えられる日本国民づくりをお願い申し上げます!

主体的・対話的で深い学びができる生徒の育成 ～問題解決的な道德科によるカリキュラム・マネジメントの構築～

麗澤大学大学院学校教育研究科道德教育専攻准教授 ^{すずき} 鈴木 ^{あきお} 明雄



1 はじめに

学校経営の重要な視点は学力向上と生徒指導であり、更に道德性の育成の観点を組み入れた中学校カリキュラム・マネジメントの構築が一定の成果を生み出すと考えた。そして、主体的・対話的で深い学びができる生徒の育成は、問題解決的な道德科授業の開発と連動して開発されるべきであることを実証した。

＜研究の経過＞

前任の東京都北区立飛鳥中学校の教育ビジョンは生徒の主体性の育成が中心軸である。

更に主体性は、問題解決能力と道德性を養うことと連動し深まっていくことを約8年間、次の研究テーマを掲げ、成果検証に努めた。

○平成24～27年度：問題解決型授業を活用した主体的な学習能力と自己評価能力の育成～小中一貫教育を活用した教科・道德指導（4ステップ・メタ認知）～

○平成28年度：アクティブ・ラーニングを活用した実践力のある問題解決能力の育成～考え・議論する各教科と道德科授業の開発～

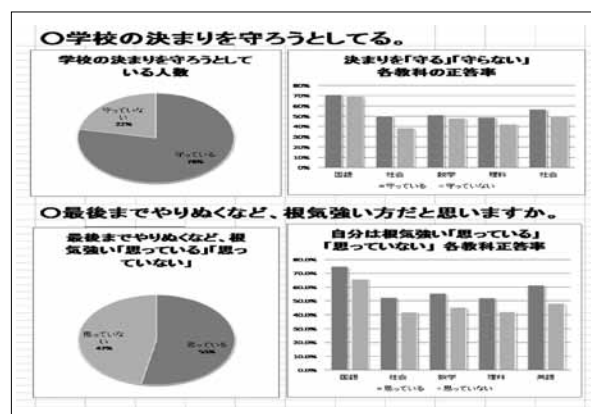
※主体的に学ぶ意欲を生み出す指導過程開発

○平成29～31年度：主体的・対話的で深い学びを实践できる生徒の育成～問題解決的な教科及び道德科の学習を通して～

※H29年度文科省国政研学習指導実践研究協力校（道德）、東京都道德教育推進拠点校、北区教育委員会研究指定校（全教科・道德科）

2 道德性の向上と「問題解決能力に関する意欲×学力」に関する調査研究

右上図は平成26年度東京都学力・意識調査における「学習や活動を支える生活習慣・やり抜く強い意志×学力」のクロス集計結果で統計的に正の相関があった（有意水準5％）。



また、教研式新道德性検査（HUMANⅢ）、学習適応性検査AAI（Academic Adjustment Inventory）を平成28・29年度2年間の経年で調査。全体としてよりよい変容が見えた。

特に、問題解決能力の基盤でもある道德性に関わる「強い意志・高い目標」「自主自律・誠実実行」、更に「人間として生きる喜び」「勤労・奉仕・公共の福祉」「愛校心」に高い変容があった。またAAI調査では、「自分で主体的に考えたことをまとめ・整理し情報を比較・統合する力」の向上を測定（詳細略）。結果、H29年度中学3年生全国学力調査：活用B問題では、全国平均を国語科9.0点、数学10.6点上回った。

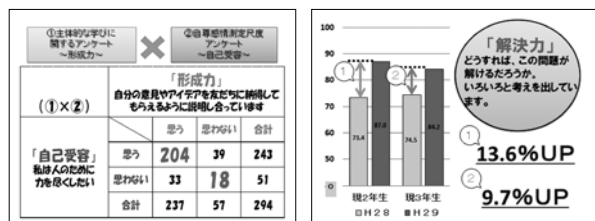
3 主体的な学習と深い学び、道德性の育成を図るカリキュラム・マネジメント

主体的・対話的で深い学びを实践できる生徒に関する「深い学び」を、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた①解決②形成③創造とした。平成29年度生徒の学習意欲や道德性の実態調査から成果検証を実施。

調査対象3点①アクティブ・ラーニング（主体的な学び）②自尊感情③家庭学習習慣について平成28年7月～1年間の生徒変容を調査。これは「主体的な学びは、生徒の学びと意欲

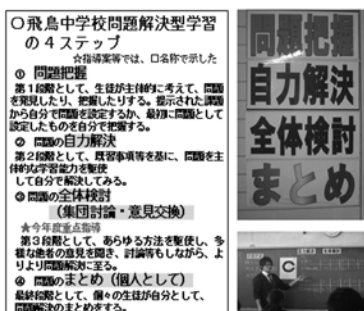


の根本として自尊感情や自分への確かな自信、他者への貢献の心等とリンクする」という仮説立てによる。生徒の具体的な実践としては学習への取り組み姿勢や習慣を測定。※下図は成果例：クロス集計1%水準で統計的に有意差があり、解決力は数年単位で向上した。



4 問題解決的な道徳科授業とカリキュラム・マネジメントの実践

問題解決型4ステップ学習指導過程（右図）を開発し、全教科領域の指導に約8年間取り組んだ。



成果は、全授業で対話的な話し合い活動が充実し、思考が深まると言えた。

※都教委は同型「東京学習方式」開発に応用。

(1)授業づくりの工夫

(問題解決的な道徳科授業展開の改善事例)

主人公であるいじめ加害者の気持ちを追いながら、自分の問題として考えていくスタイルが比較的多いが、問題解決型に改善した。

○主題名：いじめは人間として許さない

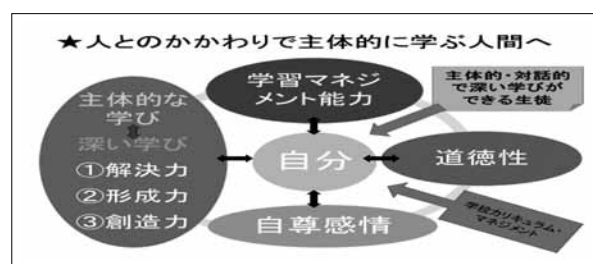
○内容項目 C 公正、公平、社会正義

対象：中学3年 教材名『卒業文集最後の二行』出典「私たちの道徳 中学校」文部科学省、『心に残るとっておきの話第二集』潮文社

本教材では、問題解決的な授業展開を3段階で修正・開発。第1段階では、「この話の『問題』を発見しよう。各自で考えてみよう。」と発問。問題把握・自力解決であるが生徒の発言は極めて拡散し、担任はねらいをしばっていく苦労があった。そこで第2段階では「主人公がT子をいじめてしまった『問題』は何か。」と

限定的に発問。そして「主人公が後ろめたさを感じながらもT子をいじめ続けたことは仕方なかったのか。話し合ってみよう。」と焦点を絞った。生徒は、いじめは許せないと理解しながら行動が伴わない問題を多面的に考え、議論した。しかし、研究協議会等ではこの発問では生徒の自由な問題意識を限定するのではないかと疑問も出され、更に第3段階で「この話の『問題』について、各自で考えてみよう。」と自力解決を大きく捉えさせてから「いじめた筆者私、いじめられたT子双方の性格や心理状態を考え、話し合ってみよう。」と集団検討させた。ここで注目したのは、いじめた者といじめられた者双方を考えることで多面的な思考が広がることである。「T子はいじめのトラウマを抱えているかも知れないが自分や仲間から新しい分岐点を得られれば、いじめを乗り越え前向きな人生にきつとなるはず。」等の前向きな発言が多数生まれた。「いじめられた者は簡単に前向きにはなれない深い傷を負う。」と、各自が自分事として価値を捉えた、深い意見交換であった。

5 研究の成果と課題



成果は道徳・教科等のカリキュラム・マネジメント及び問題解決的な授業構想で道徳性と学力向上がよりよく変容すること。そして、対話的な話し合い活動が生徒の主体的な思考を高め問題解決への意欲深化や道徳性向上に重要な役割を果たすことが分かったことである。課題は継続中の問題解決型学習指導過程の再改善。

[参考文献・教材] 次の動画から本道徳科授業視聴可

・「特別の教科 道徳」考え方と進め方（中学校編）

DVD教材（押谷由夫監修：丸善出版株式会社）

2018. 3.30

今、道徳教育で求められていること

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

あさみ てつや
浅見 哲也

1 はじめに

全世界に甚大な被害を及ぼしている新型コロナウイルスの影響により、教育関係者のみならず、多くの方々がそれぞれの立場で、その感染拡大防止等への対応に追われる状況が生まれた。特に学校では、先がなかなか見通せない状況の中で、休業期間中の子供たちの学びの確保、学校再開に向けた環境整備や生活様式への準備、家庭や地域社会との情報共有等、これまでに経験のないありとあらゆる業務が生まれたが、真摯に向き合う先生方の姿には、本当に頭の下がる思いである。

このような状況下でスタートした令和2年度の学校教育において、果たして今後、どのような対応や配慮が求められるのか。私が担当させていただいている道徳教育の立場から、その果たす役割について考えてみたいと思う。

2 今、求められる道徳教育

学校が再開すると、遅れている学習をいかに取り戻すかが大きな課題であろうと思われる。どのような状況においても、教育課程を管理し、子供たちの学びを保障するということは重要なことである。しかし、それと同様に、子供たちの心のケアも忘れてはならない。

学級担任との触れ合いも不十分なまま、子供との信頼関係も築けていない状況の中で、子供たちに学習を詰め込んでいったらどうなるのか、子供たちへの過度な負担はストレスとなり、そのストレスはどこかへ向けられていくことだろう。友達、先生、兄弟姉妹、保

護者。子供たちの心は荒れて、いわゆる学級崩壊のような状況になることも考えられる。また、臨時休業中の子供たちは、学校に行けない状況を楽しんでいたのかと言えばそうではなく、友達とも思うように遊べなかったり、将来への不安を感じていたりしていたのではないだろうか。学校が再開して全ての子供たちが登校してくるのかと思えば、家での生活に慣れてしまったり、生活のリズムが崩れてしまったりして、登校を渋る子供もいたであろう。

遅れてしまった子供の学習の確保と感染症対策のために、今後の教育活動の見直しや行事等の精選を行わなければならない。そのために大切な教育活動を簡単に取り止めてしまったら、子供たちの心のバランスが崩れていくことも心配される。

さて、道徳科の授業の目標は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと。その道徳性は、一つ一つの内容項目を手がかりとした継続的な道徳科の授業によって養われていくものである。そこで、道徳科の授業では、その各学年段階の内容項目について、相当する各学年において全て取り上げることとしており、年間指導計画に基づいて授業を行っている。このように、全ての内容項目について指導を行うことが大切ではあるが、漏れなく指導することのみが目的となてはいけない。

例えば、今の子供たちの様子を見たら、どのような内容項目に重点をおいて指導すべき



か、本来であれば、子供たちの実態を踏まえた学校教育目標の具現化、設定した目指す子供像等により重点内容項目を決めるものだが、本来ではない状況が起きているからこそ柔軟に対応し、子供たちの心のケア等も鑑みて、重点的に指導する内容を検討することもある。

「友達との距離を置きましょう」「向き合わないようにしましょう」、今の学校にはこれまでとは正反対の指導をしなくてはならない状況がある。そのためにも[相互理解、寛容][よりよい学校生活、集団生活の充実]等の指導や「学校の新しい生活様式」による様々な配慮が続くことから、[節度、節制][規則の尊重][生命の尊重]等の指導が重要になってくる。道徳科の授業の本質は、目先の諸問題への対応ではなく、子供が道徳的価値を自覚し、自己の、あるいは、人間としての生き方についての考えを深め、日常生活や今後出会うであろう様々な場面、状況において、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような道徳性を育てることである。このことをしっかりと踏まえつつ、年度当初決定していた重点内容項目だけではなく、改めて内容項目一覧表を広げてみて、この状況下での重点内容項目を検討し、授業を行っていただきたい。

道徳教育の本来のスタンスは全教育活動を通じて行うことである。今はこの意識をより一層高める必要がある。ある内容項目について、道徳科の授業では十分な指導が行えない状況があれば、教科等の指導の中で、あるいは、その他の教育活動の中で、教師が子供たちに意図的、計画的に指導する。人と人との関わりがもちづらい、心の温度が伝わりにくい状況だからこそ、温かい人間関係と一人一人の子供たちの心のケアを大切にしたい。

道徳教育を展開していただきたい。

3 指導力の向上と研修の充実

このような状況下では、子供の教育活動だけではなく、各自治体や学校等で計画されていた教職員の研修等の実施も中止や延期を余儀なくされているのではないだろうか。道徳教育に関しては、文部科学省において「道徳教育アーカイブ」を開設しており、このサイトでは、小・中学校の授業映像を見たり、全国から集められた指導案や指導資料等を手に入れたりすることができる。また、教職員支援機構（NITS）の校内研修シリーズでは、道徳教育のみならず、様々な教育課題や教科等の理論研修に役立つ動画が数多く配信されている。これらは個人の研修にも生かすことができるので、積極的に活用していただきたい。

【検索キーワード】

○文部科学省

「道徳教育アーカイブ」

<https://doutoku.mext.go.jp/>

○独立行政法人教職員支援機構

「校内研修シリーズ」

<https://www.nits.go.jp/materials/intramural/>

4 おわりに

今回の新型コロナウイルス、令和元年の大型台風、平成23年の東日本大震災等により、人は心に大きなダメージを受けながらも、皆で心をつなげて乗り越えてきた。人の心は常に試されている。他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う学校での道徳教育の成果は、こうした状況下で現れてくるのではないだろうか。

「いのち」のつながりと輝き ～千葉県における道徳教育～

県教育庁教育振興部学習指導課

1 これからの道徳教育の在り方

新型コロナウイルス感染症の脅威は、私たちの生活に大きな変化をもたらした。国からは「新しい行動様式」が提案され、自分の価値観を改めて見つめ直し、判断、行動することが求められている。

平成29年3月（小・中学校）、平成30年3月（高等学校）告示の学習指導要領前文に、これからの学校に求められることとして、児童生徒一人一人が、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」とある。

グローバル化が進展する中で、国連が推進している「SDGs（持続可能な開発目標）」が示すように、様々な文化や価値観を背景とする人々が相互に尊重し、助け合いながら生きることや、科学技術の発展や社会経済の変化の中で、人間の幸福と社会の持続的な発展の実現を図ることが、今後一層重要な課題となる。

こうした課題に対応するため、道徳教育があり、その中で人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合を含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら考え、他者対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を育成する必要がある。

しかし、道徳教育の推進に当たっては、例えば、歴史的経緯から道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があること、読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われる例があることなどの指摘がある。この

ような指摘を真摯に受け止め、「考え、議論する道徳」授業への質的転換をはじめとして、児童生徒の人格の基盤をつくる重要な役割を担う道徳教育の改善・充実に取り組んでいく必要がある。

2 本県の道徳教育推進状況

本県では、県内の公立小・中学校（千葉市を除く）、県立高等学校を対象に道徳教育の状況調査を実施している。令和元年度、小学校の、ほぼ100%で保護者や地域に向けた授業公開を行った。また中学校の76%で学校・学年通信等を通して、道徳授業の様子についての情報発信を行った。

道徳授業については、小・中学校では「発問の仕方」「話し合いの工夫」「評価とその活用」等、高等学校では、「教材の取扱い」等に課題があるとの回答が多く、小学校の89%、中学校の94%で、高等学校の94%で道徳教育の校内研修を実施した。

本調査からは、道徳の教科化を受け「考え、議論する道徳」を目指した授業を展開し、道徳教育の理解促進と、授業改善に努めている各学校の姿が見えてくる。

3 本県の道徳教育の取組

本県の道徳教育の特色として、次の3点の取組を紹介したい。

(1)道徳教育推進のための基本的な方針

県教育委員会では、平成22年12月、県の第1期教育振興基本計画を踏まえ、各学校等における道徳教育のより一層の充実を図ると



もに、家庭や地域と積極的に連携して幼児児童生徒の内面に根ざした道徳性を高めるため、県独自の方針を策定した。以降、本方針を基に県の道徳教育推進プロジェクト事業を計画、実施している。

(2)県立高等学校等における「道徳」を学ぶ時間

前述の基本方針の取組の一つとして高等学校等への「道徳」を学ぶ時間の導入の位置付けが掲げられている。「道徳」を学ぶ時間は、年間35時間程度、特別活動や総合的な探究の時間を中心に展開している。令和元年度の実施状況調査によると県立高等学校の71%で「生徒が、人間としての在り方や生き方について改めて考えることができた」という肯定的な回答があった。

(3)多様な教材等の提供

平成22年度の「青春のホイール」を皮切りに、これまで小・中学校、高等学校等の発達段階に応じた22本の動画を作成している。これも、前述の基本方針に掲げた具体的な取組に基づくものである。また、高等学校等の「道徳」を学ぶ時間で活用する読み物教材「明日への扉」も現在Ⅰ～Ⅲまで3巻を発行している。

加えて、教員の指導力向上のため小・中学校の道徳科や高等学校の「道徳」を学ぶ時間の授業動画を収録した「道徳教育指導用映像資料」も平成30年度に作成、配付し、研修等で活用している。

4 道徳教育の更なる充実に向けて

県では、令和2年3月に学習指導要領の改訂や県の第3期教育振興基本計画の策定等を踏まえ、県の道徳教育懇談会での検討を経て、道徳教育推進のための基本的な方針を改訂した。各学校の道徳教育全体計画作成の参考資料とするなど、活用いただきたい。主な改訂点は以下のとおりである。

- 「共に生きる（他者との共生）」「持続可能な社会」等、学習指導要領に盛り込まれたキーワードを追加。
- 学習内容の「関連する道徳の内容項目」に「希望と勇気、努力（克己）と強い意志」「相互理解・寛容」「勤労」等に対応する学習内容を追加し、学習指導要領の内容項目を網羅。

また、令和元年度にオリンピック・パラリンピック教育と関連した道徳教育映像教材を作成し、県内の公立学校に配付した。映像だけでなく、ワークシート、指導案、授業動画も収録されているので、各学校の年間指導計画に位置付け、活用をお願いしたい。

各学校段階の内容は、以下のとおりである。

- 小学校 内容項目「思いやり、親切」等
「『こんにちは』でつながる世界」
- 中学校 内容項目「相互理解・寛容」等
「知らなかった景色」
- 高等学校 内容項目「国際理解」等
「チャンスは自分の中にある」



5 おわりに

今後も「『いのち』のつながりと輝き～大切なあなた、大切なみんな、大切な自然と地球、そして大切なわたし～」という主題の下、各学校における道徳教育をより一層充実させ、社会の変化に対応し、人生をよりよく生きるための基盤となる道徳性を養っていききたい。

学校の教育活動全体で道徳を ～心の免疫力を高め、生徒も教職員も生き生きと～

県立大多喜高等学校

1 学校の教育活動全体で取り組む

新型コロナウイルスの猛威により、当たり前だと思っていた日常が奪われ、国内をはじめ、県下の学校も長期間の休校措置をとらざるをえない状況となった。感染拡大を防ぐため、国民一人一人の適切な行動が求められる場面が増え、多くの人々が、「人間としての在り方・生き方」について改めて考えたのではないだろうか。依然として苦しい現状が続く中、学校においても、「人間としての在り方・生き方」について、生徒にどう考えさせるか、大きなテーマとなっており、その根幹となるのが「道徳教育」である。

学校における道徳教育の充実について、学習指導要領（平成30年度告示）の第1章 総則 第1款 2の（2）には、以下のように示されている。（下線筆者）

学校における道徳教育は、人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことによりその充実を図るものとし、各教科に属する科目、総合的な探究の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、適切な指導を行うこと。

つまり、「学校の教育活動全体を通じて行うこと」は、全ての教育活動が「道徳教育」であり、「人づくり」に直結しているということである。各学校の実情や地域性を考慮して、教職員が一体となり、学校全体で取り組んでいくことが大切となる。

2 大多喜高校での実践例

(1)朝読書（ビブリオバトル・読み聞かせボランティアとのつながり）

全学年、8時25分～8時30分の5分間、朝読書に取り組んでいる。（始業8時30分）

【ねらい】

- ・落ち着いた心で一日をスタートさせる
- ・本を先生として、心の栄養を蓄える

【朝読書のルール】

- ・毎日続ける
- ・全員で取り組む
- ・自分の好きな本を読む
- ・開始の時刻を徹底する

【成果】

- ・遅刻がほとんどない
- ・物事への集中力が増す
- ・時間を見て行動できる
- ・仲間への配慮

また、読書への興味・関心を高める機会として、本校では、1・2年次に「ビブリオバトル」を開催している。ビブリオバトルとは、「本を通して人を知る・人を通して本を知る」ことをねらいとした、本の書評ゲームである。円滑なコミュニケーション能力を育む上での一つのツールとして取り組んでおり、例年、クラス内で予選を行い、クラス代表によるチャンプ本決定戦を学年毎に実施している。

ボランティア活動にも力を注ぎ、大多喜町教育委員会と連携し、「大多喜町読み聞かせボランティア」に取り組んでおり、昨年度は9月と11月の2回、近隣の大多喜小学校で実施した。

ただ本を読むだけでなく、毎日積み重ねて読書を続けたことで、仲間とのコミュニケーションや地域の小学生への還元など、「人とつながる」ことに活かされており、生徒の自信にもつながっている。

(2)大高探究（総合的な探究の時間）

※大多喜高校を略して「大高」

総合的な探究の時間で、昨年度の1学年から大高探究（探究活動）に取り組んでいる。大高探究では、地域と協働的な学習を展開し「地域を知り、地域に興味を持ち、地域の課題を考える」大高生を育てるとともに、それらの過程を通して、探究活動に必要な基礎的なスキル（課題発見、フィールドワークの進め方、プレゼンテーション技術等）の習得を目指している。

【概要】

- ①課題発見、フィールドワークの進め方、プレゼンテーション技術等については、大学等より外部講師を招き、指導を行う。
 - ②連携機関（コンソーシアム）による出前授業を実施する。生徒は、個人若しくは共通の興味・関心を持つ生徒でグループをつくり、テーマを設定し、協働して研究を進める。
 - ③現地視察、聞き取り等フィールドワークを実施する。
 - ④成果をまとめ、発表会を行う。（ポスターセッション、口頭発表）教員は出前授業実施者及びコンソーシアムと連携し、コンソーシアム交流会（年2回、出前授業時及び成果発表会時）等を行うことで探究活動の質を高める支援を行う。
- ・グループごと担当教員を配置し、生徒の主体的取り組みを促す支援を行う。

【日程】

- 4月 オリエンテーション
- 5月 GW期間中の課題及び自己評価（ルーブリック）（一人一人が日ごろ何気なく興味関心を持っていることの中から

テーマを決めて、調べたり、考察したりしたことをA4サイズ1枚のレポートにまとめ発表）

- 6月 探究活動に関する講演
「探究活動に必要なこと」
講師 梅澤貴典氏（中央大学職員）
- 7月 コンソーシアムによる出前授業の実施
テーマ決定・グループ分け
- 8月 フィールドワーク・研究活動
- 9月 プレゼンテーション・自己表現に関する講演
「インパクトのある発表の作り方を考えよう」講師：ガイタニディス・ヤニス氏（千葉大学国際教養学部教員）
- 10月 発表準備
- 11月 ポスターセッション（中間発表）
- 1月 ポスターセッション（成果発表会）
- 1月16日（木）公開



3 心の免疫力を高めよう

子供たちの心を前に向け、明るい未来を創造していくには、目の前にいる大人が、良き姿でいなければならない。子供たちの心の免疫を高めていくと同時に、教職員の心の免疫を高めることも大切である。人間関係が良好で、居心地が良く、自分らしさを存分に発揮できる職場環境を整えることで、教職員の一体感が生まれる。この一体感が、子供たちへの良き教育へとつながるのではないだろうか。



平時の校長、有事の校長

浦安市立富岡小学校長 かつた ひでき 勝田 秀樹



1 非常時こそ平常にしている

令和2年3月、臨時休業中のため縮小した卒業式を行った。出席者は卒業生と保護者、教職員である。来賓や在校生は出席していない。

感染拡大防止のため、入退場と卒業証書授与で登壇する時以外はマスクを着用した。歌も着用したまま歌った。実質、卒業式練習はほとんどできなかったが、卒業生は立派な態度と所作で卒業していった。(同時に例年よりも少ない時間で卒業式の準備ができることがわかった。よって本年度は、はじめから少ない時間で準備をする。)

式後、保護者が作成した卒業記念DVDを鑑賞する時間が急遽設定され、式に出席した全員で鑑賞した。そこで代表の保護者がこんな挨拶をした。

「2月27日夕、安倍首相が全国の学校を3月2日から一斉に休校にすると突然発表した。その発表を聞いたとき、親も子も学校はどうなるのだろうと不安で心配で仕方なかった。しかし、翌28日朝、学校の前を通ると、校長がいつものように笑顔で挨拶をしていたので、学校は大丈夫だと思い、とても安心した。」

実は2月28日朝、いつものように校門で挨拶をするかどうか一瞬迷った。報道に接した保護者からの問合せがあり、対応に追われるだろう。児童も教職員も不安になっているだろう。いつもと違う朝だ。校長は校長室や職員室に待機していた方が良いのではないかな。

いや、だからこそいつもどおり挨拶をする

ことを決めた。朝一番に臨時の職員打合せをすることだけ伝え、校門に立った。

案の定、登校してくる多くの児童の目はとても不安そうである。(マスクをしているので、余計に目立つ。)特に配慮が必要な児童ほど、その傾向が強いと感じた。

何人もの児童から質問を受けた。

「先生、学校どうなっちゃうの?」

私の答えは次のとおり。

「学校は大丈夫だよ。」

ところで、9年前の東日本大震災発生当時、私は市立幼稚園長だった。浦安市は市の面積の8割以上が液状化の被害を受けた。甚大な被害を目の当たりにして不安な職員に対し、「大丈夫。何とかなる。」と励まし続けた。もちろん根拠などは全くない。励まし続けただけだ。

当時の職員から、

「あの時、園長が『大丈夫』と言ってくれたので、ほっとしたことを覚えている。」

と今でも言われる。

校長は非常時だからこそ平常にしている。そして、校長は特別な感情を露わにしないように気をつけている。

もちろん楽しい・うれしい・喜びといったプラスの感情は、露わにするよう努めている。

反対に、怒りや不安・焦り・悲しみといったマイナスの感情を極力、人前で露わにしないようにしている。露わにすると、周りの職員の意欲が低下してしまう。(少なくとも私はそうだった。)

ただし、一人でいるときは違う。そこで自分の感情を吐露し、正直に向き合ったり、適切に発散させたりしないと心身とも「ゆがみ」が生じる可能性がある。

2 あえて非常時を生かす

この原稿を書いている6月現在、学校が再開した。再開自体は喜ばしいことではあるが、平常に立て直すために解決すべき主な課題は次のように山積している。

- ・前年度未学習分の指導と評価をどうするか
- ・「主体的・対話的で深い学び」をどうするか
- ・年間指導計画の見直しをどうするか
- ・家庭学習分の評価をどうするか
- ・新学習指導要領をどうするか
- ・評価項目と基準（規準）をどうするか
- ・各活動全体計画の見直しをどうするか
- ・行事の削減をどうするか
- ・心のケア（児童・教職員）をどうするか
- ・感染拡大防止対策をどうするか
- ・関係諸機関・団体等との調整はどうか

主な課題だけでもこれだけある。しかも一つ一つが、大きくて重い。

私は、この3月から5月にかけて職員に繰り返し伝えたことがある。

「現在は非常時である。いつものこと、例年のことが通用しない。逆に考えれば、今しかできないこと、今だからこそできることがある。今はピンチをチャンスに変えることができる。一人一人の経験と英知を結集し、この非常時に当たってほしい。」

そこで、年間指導計画について例に挙げた。

- ・各学年で当該学年の見直しを行うこと
- ・「育成したい資質・能力」を再確認し、単元（題材）の精選を行うこと
- ・単元（題材）の軽重を行うこと
- ・学習指導要領に2学年分の内容がまとめて

記されている教科では、次年度に指導すべきことを必ず引き継ぐこと

この見直しは、各自または少数で協議しながらできるカリキュラムマネジメントである。この時期だからこそ、教職員全員が教育課程の編成に当事者意識をもって参画できる。

3 非常と平常は表裏一体である

校長として着任した昨年、折に触れ教職員に言ってきたことがある。

「学校には課題や問題が必ず発生する。学習・生徒指導・特別支援・健康面の他、事故や怪我も必ず発生する。発生したとき私たちは『困ったな。どうしよう。』と思う。思っ
て良い。普通だ。しかし、発生したことは、私たちにとっては指導の絶好の機会であり、児童にとっては成長の絶好の機会である。また、発生を未然に防ぐ、発生しても被害や影響を最小限に留めることは当然である。よって発生することを前提で計画・準備をするべきである。つまり『発生したらどうしよう』ではなく、『発生したらこうしよう』と意識をして実践に当たってほしい。」

以上、「私の教師道～学校を創る～」をテーマに普段実践していること、考えていることを中心に毎日を振り返って書いた。書いてある内容は、私自身への戒めであり、私自身が最も気をつけるべきことでもある。書く機会を与えてくださった皆様に心より感謝を申し上げます。

なお、本稿の題名は、故佐々淳行氏の著作を参考にした。危機管理について氏の著作から多大なる示唆を受けた。この場を借りて佐々氏にも感謝を申し上げます。



チーム・組織として進める学校運営

四街道市立旭中学校教頭 こめもと けんじ 米元 賢志



1 はじめに

本校は、四街道市の南東部に位置し、緑に囲まれた自然豊かな地域にあり、約360名の生徒が在籍している。

学校教育目標は「豊かな心を持ち、主体的に未来を切り拓く生徒の育成」であり、その具現化を進めるため、校長の指導を得て、取り組んできた。

2 新任教頭研修を振り返って

令和元年度、年3回県総合教育センターで実施された研修においては、学校の管理・運営に関する諸問題について理解を深めるとともに、教頭としての役割や心構えについて考える機会となった。

また、本県の最も大きな課題として、働き方改革、不祥事根絶、人材育成が挙げられており、本校においても年間の重点課題としてその解決に取り組んだ。

3 教頭として心がけたこと

学校が保護者や地域から信頼されるためには、教職員が子供たちのために一つの目標へ向かって組織的に教育活動に当たることが最も大切であると考えている。

そのために、まず、校長の学校経営方針を熟考し、理解を深めた上で校長と意見交換を行い、学校教育目標の具現化に努めた。

次に、教職員との協力・調整を図るために、職員会議や打合せ等で共通の目標を共有化した。

そして、学校運営、授業や行事等の教育活動を進めるに当たっては、個業化を排し、チーム・組織で取り組むことを徹底させるようにした。

4 本校の実践

(1)働き方改革の実践

働き方改革の目的は、「これまでの働き方を見直し、自らの授業を磨くとともに日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになること」である。

そのために、以下の取組を行った。

①意識改革に関すること

パソコンやタイムカードによる時間管理を実施し、勤務時間を職場全体で意識するとともに、計画的に業務を進めることを推進し、限られた時間の中で必要な取組を行うようにさせた。

また、計画的な年次休暇の取得を促すとともに、管理職が率先して年次休暇の取得や定時退勤を行い、ワークライフバランスの推進に向けた職場風土の醸成に努めた。

②会議に関すること

会議時間は原則1時間以内、勤務時間内に行うことを徹底し、校内PCを活用することで、会議のペーパーレス化を図り、資料の印刷や配付に係る時間を削減した。

更に、朝の打合せは、月・木曜日の2回、主任会議は週1回から2週に1回とする等、

会議の日数を縮減した。連絡事項はメールや校務支援システムを活用し、情報共有を図った。

③学校からの連絡に関すること

学校だよりに学年だより、保健だよりを整理・統合することで、各種たよりの作成業務を軽減し、連絡メールの活用により、配付文書の精選を図った。

④校務分掌・学校行事に関すること

体育祭等の駐車場係の負担をなくすために、民間警備会社に駐車場の整理を委託した。引き継ぎ業務の可視化を図り、業務内容の視覚化、分掌ごとに引き継ぎフォルダを作成することで、効率よく業務を推進できるようにした。

⑤部活動に関すること

部活動ガイドラインを作成し、平日は2時間程度の活動で週1回は休みとした。土日のどちらかは休みとし、3時間の活動とした。また、部活動指導員の活用やボランティアによる指導補助を依頼することで教職員の負担軽減を図った。

取組を始める前は、教職員の中に業務を縮減することや新しい取組への不安や心配があったが、徐々に定着し、業務軽減による余裕が生み出されたと考える。

(2)不祥事根絶に向けて

一度でも不祥事が起こると、生徒・保護者・地域からの信頼が崩れ、それを取り戻すには、膨大な時間と努力が必要となり、教育活動へも多大な影響が出ることから、絶対に起こしてはならないことである。

本校での不祥事根絶の取組は、①生徒・保護者対象に年4回のわいせつ・セクハラ・体罰に関する調査②教職員への毎月の調査③生徒指導を行う際の複数対応④月に1度の不祥事防止に関する研修会⑤職員打合せや職員会

議、不祥事に関する報道等の機会を捉えての管理職による指導等が挙げられる。

継続した不祥事根絶の取組は確実に教職員の意識を向上させ、自分の学校から不祥事を絶対に出さないという覚悟で教育活動に当たることができている。

(3)人材育成の計画と活用

教職員の指導力を向上させるためには、計画的・継続的な人材育成の推進が重要であり、本校では以下について重点的に実施した。

①計画的な人材育成について

一人一人の教職員の特性やライフステージを把握した上で、学校教育目標の重点項目と関連させ、身に付ける力を明確にし、研修に取り組んでいる。

また、目標申告シート、職務能力発揮シートの作成や面談を通して、進捗状況の確認や評価を行い、常に目標を意識しながら職務に当たるようにしている。

②ミドルリーダーの活用について

主任やミドルリーダーをメンターとし、若手教員と日々の教育活動や校務運営に当たることで、お互いが支援・助言・相談をするように取り組んでいる。

更に、普段からのコミュニケーションを緊密にし、職場の連帯感やチームワークを育むことに力を入れている。

5 おわりに

本校教職員は、チームワークの重要性を理解し、どんな困難も、共に乗り越え、学校としての力をつけていくことができた。

今後も、子供たちが通いたくなる学校、地域・保護者が応援したくなる学校、教職員が働きたくなる学校づくりの実現のために日々研鑽を積んでいきたい。



「つなげる」「つながる」を テーマとして

県立仁戸名特別支援学校主幹教諭 たかはし けいこ 高橋 敬子



1 はじめに

本校は「病気の治療」と「学校教育」を両立し、全県を学区として病弱児童生徒を対象とする特別支援学校である。隣接する千葉東病院に入院する児童生徒、自宅から通学する生徒、千葉東病院以外の千葉市内の病院に入院する児童生徒が在籍しており、入退院に伴い、年間約140件の転出入がある。

2 新任主幹教諭研修から

昨年度、県総合教育センターの新任主幹教諭研修を受講した。初回の研修会で、メジャーリーグの大谷翔平選手が高校時代から用いている目標達成シートを活用し、主幹教諭としての課題を考える時間があった。本校で初めての主幹教諭の配置ということもあり、自分が何をすべきかつかみきれずにいた時期の研修であった。目標達成シートに主幹教諭としての取組を書き出すことで、学校としての課題を改めて考えるとともに、必要な業務などについて分類・整理する機会となった。この研修を機に、兼務していた特別支援教育コーディネーターとしての就学や教育相談、その他人材育成といった業務などについて、自分の仕事の軸となるものを整理しながら取り組むことができるようになった。

3 「つなげる」ことを意識して

(1) 学校運営として

本校の教育課程は、小・中・高等学校に準ずるものや自立活動を主としたものまで幅広く、学習の場も本校や千葉東病院、千葉市内の他病院など様々である。全校行事であって

も一堂に会することが難しい中、職員同士が、共に考え、支え合うことの大切さを痛感している。主幹教諭として、学部・学級間のつながり、保護者とのつながり、病院等の連携機関とのつながりを大切にしながら学校運営に関わることを心がけている。

特に、今回のコロナ感染症対策として取り組んできた各部の取組やその進捗などを職員会議等の場で全体に周知することをはじめ、児童生徒の情報や分掌の活動など、必要に応じて適宜共有し、学校の中を「つなげる」ことを意識した働きかけを進めている。

(2) 人材育成として

人材育成、特に若年層の育成は主幹教諭に求められる大事な仕事の一つである。研究や研修担当と連携し、学校としての課題に対応する研修会を企画すること、若手とベテランをつないで日々の実践について学ぶ場を設けることなどが必要と考える。昨年度は「アセスメント」を取り上げて行ったが、本校の課題や職員のニーズを把握した上での希望者参加型の校内ミニ研修会等について、今年度も引き続き実施していきたい。

4 おわりに

現在、学校は、感染症拡大防止のための長期の休校、そして段階的な再開と、これまでにない状況の下で運営を行っている。今だからこそ、学部間を「つなぐ」総合的な調整が必要と考える。病気や障害のある子供たちが安全に安心して学校生活を送れるよう、先生方と協力して取り組んでいきたい。



コミュニケーションの大切さ

松戸市立六実小学校教諭 にしかわ 西川 たくま 琢麻



初任者としての一年間は、初めて高学年の担任となったということもあり、講師時代とは違った悩みや迷いを抱くことが少なくなかった。そんなとき、初任者研修で同期の仲間が集まり、ディスカッションなどを通して情報や意見を交換することで、解決の糸口を見出すことができた。また互いに話をし、聞いてもらうだけでも気持ちが晴れた。初任者研修で私が感じたことを生かし、現在、勤務校では二つのコミュニケーションを意識して取り組んでいる。

一つ目は、教員同士のコミュニケーションである。学級で起きた問題を一人で抱え込むことなく、些細なことでも学年の先生方、必要があれば管理職や学校全体にも伝えるようにした。そうすることで学級の実態を知ってもらうことができ、教員間でも良い関係が築いていけると考えたからである。

二つ目は、児童とのコミュニケーションである。昨年度からの持ち上がりで、今年度は6年生を担当している。学級の子供たちは様々な悩みを抱える時期であり、私は、児童の話を傾聴し寄り添えるよう、積極的にかかわりをもち、児童理解に努めたいと考えたからである。

児童の成長のためには、教員だけでなく、保護者、地域、関係機関など、たくさんの人々との協力が不可欠である。これからも多くの人々とのコミュニケーションを大切にし、児童と共に成長できる教員になりたい。



初任者研修を通じて学んだこと

市川市立第四中学校教諭 やまざき 山崎 ひろゆき 浩之



私は、昨年度、初任者研修に参加し、多くのことを学んだ。その中で、特に大切にしたいことが二つある。

一つ目は、常に新しいものを吸収し、それを効果的に利用することである。昨年度、市川市では各教室に大型テレビと書画カメラが導入された。ICTを用いて視覚に訴える工夫をした授業づくりが求められている中、研修で学んだことを実践すると、生徒が惹きつけられていくことを肌で感じた。今後も授業で積極的に取り入れ、生徒の発表や説明の機会でも活用していきたい。

二つ目は、研修で講師の先生から頂いた「初任者かどうかは、生徒や保護者には関係ない」という言葉である。昨年度、初めての担任が三年生で、進路指導もあり、正直多くの不安があった。しかし、目の前の生徒や保護者にはベテランも若手も関係ない。経験の少なさをカバーできるのは、誠意と準備、そして何よりも生徒のことを第一に考えた行動だと考え、実行した。卒業式での生徒の様子を見て、自分の思いが少しは伝わったのではないかと実感した。今後も生徒に対する熱い思いを持ち続け、初心を忘れずに、研鑽を積んでいきたい。

最後になるが、心に留めていきたい言葉を紹介する。“言行一致”である。言っていることとやっていることが一致していなければ生徒もついてこない。自分自身が生徒の模範になれるよう日々学び続け、生徒と共に成長できる教員でありたい。



主体的に考え、互いに認め合う 道徳授業を目指して



睦沢町立睦沢小学校教諭 やまうち 山内 ゆり

1 はじめに

小学校で「特別の教科 道徳」が実施されて3年目になる。「考え、議論する道徳」の実践が求められ、児童が物事を多面的・多角的に考えられるよう、実態に応じた指導をしていくことが重要となっている。

私は、道徳の授業は、児童が臆せず発言できる絶好の場と考える。「道徳って自分の意見を言えて聴いてもらえるから楽しい」と感じさせられることが、「考え、議論する道徳」にもつながり、互いに認め合う授業になっていくと考える。

2 授業での取組

(1)学習形態の工夫

①ラウンドテーブル

「ラウンドテーブル」という学習形態を道徳の時間の基本的スタイルとして実践している。全員前を向いての座席形態では、互いの表情がみんなには伝わりにくい。誰からもみんなの顔が見えるコの字にもう少し丸みを持たせた「ラウンドテーブル」形態にするとお互いの発表を大切に聴こうという気持ちが育ちやすい。また、ラウンドの中央部分は役割演技の舞台になったり、教材の読み聞かせの時に集合して座るスペースになったりと学習形態に変化を与え、集中力が途切れることなく授業に取り組める。

②ペア・グループ学習

低学年ではペアによる対話、中・高学年ではグループでの話し合いという形態も、多様な

考えを引き出すために有効と考える。私は、全体での話し合いの前に取り入れることが多い。少人数での対話では、緊張せずに思いを伝えやすいので、「自分の考えを言えた」という自信がわき、全体での話し合いでの発表にもつながっていく。

(2)全員発表

道徳の時間の中で全員が発表する機会を設け、全員に活躍の場を与えることに努めている。このとき、全員が自信をもって発言できるように、教師も児童の意見に共感を示すようにすることが重要となる。一人一人の意見を聴くことで、学級全員で学ぼうとする気持ちが感じられると共に、話し合いに深まりも出てくる。発表に対して消極的な児童も、回を重ねていくうちに自分の考えを発言するようになっていく。全員発表が定着すると、発言への意欲と周囲の考えに共感する力が育ってくると考える。

(3)学年道徳

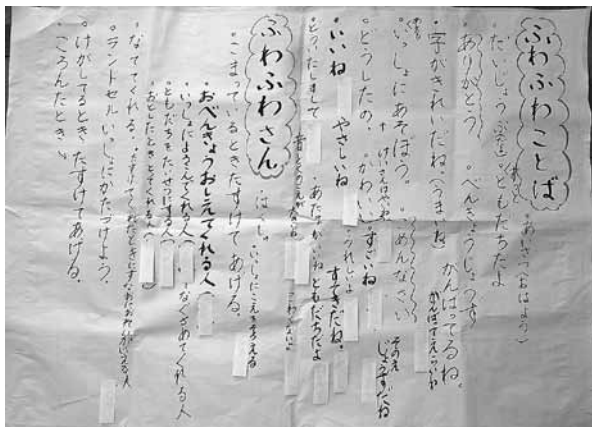
学年で学級数が複数ある場合は、学年道徳を行うことも有効な手法と考える。学年で同じ空間を共有することで道徳意識を高めるとともに、指導について学年内での共通理解も深まる。

実践1 1年B(6) 親切・思いやり

「ふわふわことば」と「ちくちくことば」

「ふわふわことば」と「ちくちくことば」という取組は多くの学校で実践されていることだろう。低学年では「親切・思いやり」「友情、信頼」「個性の伸長」など様々な内容項目の授業として実践することができる。昨年

度は学年道徳として、授業参観の日に行った。言葉だけでなく、「ふわふわさん」「ちくちくさん」として行動にも目を向けさせた。人を傷つける言葉や行動、温かい言葉や行動をワークシートに思いつくだけ書いてから発表させた。授業での発言は模造紙に書き、授業後は学年前の廊下に「ふわふわことば」「ふわふわさん」のみ掲示した。更に、日常で見つけた温かい言葉や親切な行動を付け加えられるようにしたことで日常の中でも意識する児童が見られるようになった。



(4) 学校生活や家庭へつなげる

実践例2 1年A(4) 個性の伸長

じぶんのいいところ「みんなじょうず」

(光村図書)

授業と実生活がつながるように、友達のよいところを次々に誉めていく「ほめほめりレー」という活動を取り入れ、互いのよさに目を向けさせた。担任も意図的に参加することで共感的理解を示した。2年前に実践した際には、事前の学級活動で友達のよいところ探しをし、それをカードに書き道徳ノートに貼っておくようにした。自分のよいところがなかなか見いだせない児童にはそのカードを見て考えさせ、自分のよいところを自覚できるようにした。授業で書いた「自分のよいところカード」にはよいところをもっとよくするためにはどうしたらよいかも書かせた。授業後は掲示し、自他のよさを継続

して認め合えるよう心がけた。また、家庭からも「〇〇のよいところ」として手紙を書いてもらう活動を取り入れた。手紙を受け取った児童は自分のよさを認めてもらえた喜びを感じることができた。このように、1時間の道徳の授業を学校生活や家庭生活へとつなげることができ、道徳教育の啓発にもなった。

(5) 心に響く教材の選択

ねらいに迫るためには、どんな教材が児童の心に響くのか、教科書に留まらず、新聞・絵本・映像資料などから吟味し、選択することも大切である。

実践例3 1年D(17) 生命の尊さ

いのちをまもる

「はなちゃんのはやあるきはやあるき」

前任校で防災教育を研究していた際、東日本大震災での実話を基にした絵本「はなちゃんのはやあるきはやあるき」を教材として選択した。児童にとって身近な絵本を発問に合わせて区切りながら読み聞かせをした。絵本の主人公に共感しながら考えたり発表したりすることで、非常時だけでなく、日常生活での行動の積み重ねが「命を守る」ことにつながるという意識をもつことができた。

3 おわりに

道徳の授業は奥が深い。だから、道徳は難しい。故に楽しい。児童にとっても楽しみながら自己を見つめる時間になって欲しい。そう考えて指導方法を模索しながら取り組んでいるが、恥ずかしながら何か特別効果的な取組ができているわけではない。

今回、このような機会を与えてくださったことで、自己の実践を振り返ることができたことを感謝したい。そして、これからも児童が主体となり他者を認め合い、全員が活躍する授業を目指して、日々の実践を積み重ねていきたい。



一斉指導の中で有効なユニバーサルデザイン教育とは ―板書とノート整理を中心に―

県立生浜高等学校教諭 うえはら みわ 上原 美和



1 はじめに

本校は全日制と三部制の定時制の四つの普通科課程を有する県内唯一の学校である。単位制を導入しており、1科目45分授業×2時間連続の授業を実施している。子供たちの特徴として、ものの見え方や理解に個性をもっていたり、人間関係の理由からつまづき傷ついたりした経験をもつ生徒が少なくない。多くの生徒が苦手意識を変えたいという気持ちはあるものの、机に向かうことを敬遠する傾向にあるため、90分という時間をどう活用するかが課題となる。更に、外国籍生徒の増加も加速しており、手厚い個別指導を必要としている。以上のことから、授業における一斉指導の実践がより一層複雑な状況になっているが、工夫次第で平素の授業をよりよいものにできないかと考え、本研究を実践した。

2 実践と成果

(1) 授業のリズムづくり

① 仮説に基づいた授業構成

初回授業で、生徒の授業や教科に関する意識をアンケート調査している。結果を見ると、社会科は苦手だという意見が多数あった。理由は「暗記が多すぎる」「資料やグラフが読めない」「(情報が多すぎて)何を見たらいいかわからない」「じっとしていられない」「興味がもてない」等多岐にわたった。まずは授業に主体的に取り組めるような集中力の涵養を第一に考え、授業の骨子である板書・ノートづくりに焦点を置くこととした。

② 授業の構造化

TEACCHプログラムを参考に、毎時の授業構成を **あいさつ(導入)→板書・机間指導→展開→結論・ノートまとめ・次回予告** というルーティンを作った。毎回同じ構成で行うことで、授業に見通しがもてるよう生徒のリズムづくりをねらったからだ。また、板書を授業の冒頭に据えたことは、「書く」行為によって集中し始めると私語が抑えられ、授業の導入として有効だった。

③ 学習活動は一つずつ/板書を写す時間を大切に

授業を行っていて気付いたことは、生徒にとって＜ながら学習＞は能率が悪いということだった。読み書き計算類推等、学習活動は一つずつ丁寧に行うことが授業で注意した点だ。また、毎時「板書をノートに写します。○分まで時間をとろうか。」と教師が簡潔に言葉かけをし、机間指導を始めた。この間は集中しきれていない生徒や支援を必要とする生徒と会話できる貴重な時間にもなっているうえ、日本語やノート整理が苦手な生徒を把握し、視覚的な課題をもつ生徒の確認ができたので板書を写す時間は有益と捉えている。

(2) 板書の工夫

① 虫食い板書



板書を行うにあたり授業のポイントとなる重要語句を文字数分空欄にしたものを板書

する。[展開]で説明を聞いてから[結論]でじっくりと空欄部分に語句を入れ反復しながらノートまとめをしている。

②文字の大きさ・チョークの色

空欄に埋める重要語句は色付きチョークを使っている。以前、赤が灰色に見える生徒や黄色と橙色の判別が難しい生徒がいたため、赤色で文字は書かない、重要語句は決まった色で書くようにして区別している。生徒に確認したところ、蛍光橙色が最も黒板から見やすいとの声を受けたため、現在はこの色を使っている。色の構造化を図ると、ノートまとめにも個性がみられ、自分なりに好きな色を使ったり、重要語句を欄外に記して自分なりの説明でまとめたりするようになった。

気候帯	特 徴	気候帯
A(熱帯)	ホーキサイト・酸化＝赤色＋鉄	→栄養X
B(乾季)	腐植層ない	→栄養X
C(温帯)	栄養O	→栄養O
D(冷帯)	栄養O	→栄養O

③地図資料やグラフについて

どの生徒にも視覚的な支援は有効で、図録や地図を活用すると興味をもつ生徒も少なくない。だが、地図帳等資料から自分の必要な情報だけを抜き取ることが難しく「地図帳の○ページ」と示しても一人で探せない生徒が多い。必要な情報だけを抜き出した補助プリントを配付してノートに添付するよう指示し、補助プリント学習後に資料集を確認している。

(3)ノート作成

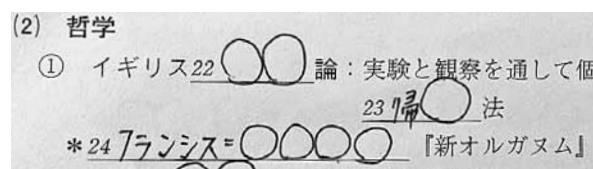
①理解度を図るものさし／反復学習に利用

ノートづくりに力を入れる理由は、確認小テストを実施した時、自分のノートを見ればわかることを通じ、成果の可視化から自信と学びの意欲を引き出すためである。

②板書をする生徒の反応と空欄の活用

前述の空欄があると、生徒はそれにあわせてスムーズにノートに写す。以前は、空欄に直線

を引くのみにしていたが「何文字分空けるの?」という声があったため、文字数分の下線を引くように改善した。文字数が明確だとバランスも取れるうえ、解説を聞く前のヒントとして印象付けられる。また、空欄ヒントは既成プリントに手書きで○印をつけるだけでも効果があった。

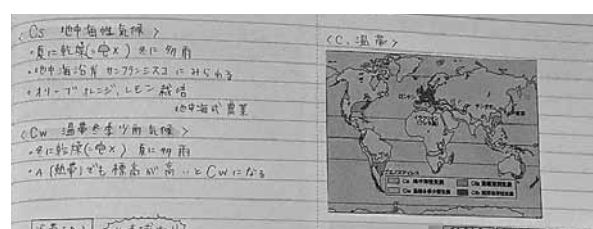


③ノート整理が苦手な生徒への対応

集中しやすい座席へ移動する、特定フォントで文字拡大した補助プリントを手渡す、教師用ノートを見せて書写する等、生徒の実態に合わせて行っている。特に視覚的な課題をもつ生徒に関しては、本人の希望を聞いて実態が公にならないよう注意している。

3 おわりに

考査前、仲間同士でノートを見せ合う姿を見かける。自分の作り上げたものが役立つことがわかり、平素の授業から工夫しようとしている生徒も出てきた。



個性的なノートが年々多くなり、評価やコメントをしていてとても楽しい。「苦手を克服したいから、また社会科をやりたい。」と選択授業の履修希望をだす生徒もおり、ささやかながら今後の指導のきっかけをつかめたような心持ちであるが、この始まりを大事にしてより深く生徒の意欲を引き出せる授業を行いたい。最後にと組にご理解・ご協力くださった関係の先生方に心より御礼申し上げたい。

見方・考え方を育て機能的に言語運用する語彙指導の研究 —継続した言葉の収集と個人文集作りを通して—



木更津市立請西小学校教諭 さこだ なおや 迫田 直哉

1 研究主題について

新学習指導要領では、語彙指導による言語活動の質の向上が求められている。本研究では、実生活で生きて働く言葉の力を質と量の両面から捉え、以下の2点を目指して語彙指導を設計した。(1)言葉による見方・考え方を働かせ、場に応じて機能的に言語運用する力を育成する。(2)着実に語彙の量を増やすとともに、言葉への信頼感や有用感を高める。

2 研究の実際

(1)語彙指導カリキュラムの設計

語彙の量を着実に増やし、機能的に言語運用する力を育成するためには、日常の言語生活の中で言葉を意識する構えを作り、計画的に継続して指導を積み重ねる必要がある。そこで、短作文による個人文集作りと言葉の収集とを適宜連動させながら並行して展開する語彙指導カリキュラム(図)を設計した。



図 語彙指導カリキュラム

(2)新聞を活用した言葉の収集「ことバンク」

「ことバンク」は、言葉の収集を貯蓄になぞらえた学習である。スクラップした新聞記事から選んだ言葉を視写し、言葉の意味・類義語・対義語調べや短文作り等を行うと、学

びに応じて通帳を模したノートにワードマナー【G(ゴイ)】が付与される仕組みである。以下3点の手立てを適宜とりながら行った。①記事を自由に選べる環境作り。②取組を共有する掲示物作り。③貯まったワードマナーで「先生方が大切にしている言葉シールと解説文」が当たる「語チャポン」を回せる企画。これらによって、児童は意欲を持続し、言葉への意識を高めながら着実に語彙を蓄積することができた。

(3)短作文による個人文集「12歳の大自典」

「12歳の大自典」は、短作文を積み重ねて作る個人文集である。短作文のテーマは、深化・拡充をねらう語彙、話題や文種、育成する見方・考え方や言語運用等を整理し、児童の言語生活を基盤として【①私にとっての秋 ②校歌と私 ③12歳のお悩み相談室 ④私ならこう褒める ⑤私を支える言葉 ⑥私の名前】の六つを設定した。書く際は、構想段階・記述段階・推敲段階に重点を置いて語彙指導を行った。構想段階では、多面的な見方・考え方につながる語彙を資料や副題で提示し、発想を促した。記述・推敲段階では、教師モデルや語彙表を活用し、文脈に応じた言葉を適切に選択し機能的に運用する一助とした。

3 研究のまとめ

児童の振り返りには、場に応じて言葉を使い分けることの大切さや言葉のもつ奥行きへの気付き、言葉と豊かに関わる自分を肯定的に捉える感想等が見られた。今後も、児童の言語生活とのつながりを見据えた計画的・継続的な語彙指導の在り方を考えていきたい。

道徳的判断力を高める指導の工夫 —現代的な課題を取り上げた教材開発と授業実践を通して—

香取市立小見川中央小学校教諭（前香取市立津宮小学校教諭） おおかわ たまよ 大川 珠代



1 研究主題

道徳科の目標は道徳性を養うことであり、道徳性は道徳的判断力、心情、実践意欲と態度の諸様相から構成される。グローバル化が今後一層進展する中で、多様な文化や価値観をもつ人々と関わり、共生していくことが課題とされる中、自ら考え判断していく道徳的判断力の育成がこれまで以上に求められている。そこで、現代的な課題を取り上げた教材開発及び児童が多面的・多角的に考える授業実践を行い、道徳的判断力の高まりへの効果を明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の実際

(1)現代的な課題と教材開発について

現代的な課題とは、葛藤や多様な見方・考え方があり、一面的な理解では解決できない課題である。教材開発は、身近な社会的課題を取り上げて行った。「現代的な課題」と開発教材の概要は次のとおりである。

- ①「防災教育」…災害時の避難所におけるベットの扱いを巡る問題について考える。
- ②「超高齢社会」…高齢者の運転免許返納に関わる問題について考える。
- ③「伝統文化教育」…地域の伝統芸能の継承に関わる問題について考える。

その他、「多文化共生社会」「人権教育」を合わせて5実践を行った。

(2)多面的・多角的に考える学習について

現代的な課題は答えが一つではなく、多面的・多角的に考えることが重要である。本研究では、次の二つの手立てを講じた。

①思考ツールの活用

道徳的な問題を教材に関わる複数の立場や

視点から多面的に考えるために、思考ツール（ウェビング・Xチャート・コンセプトマップ等）を活用した。それによりそれぞれの立場の考えを可視化し、問題を多面的に捉えることができるようにした。

②問題解決的な学習

教材をもとに児童が問題を把握し、問題の解決に向けて友達と話し合い、自己決定をする授業構成にした。自他の考えを比較検討し、再考する。その上で自己決定をし、振り返りをする学習を積み重ねることで道徳的判断力を高めていく構造である（図）。

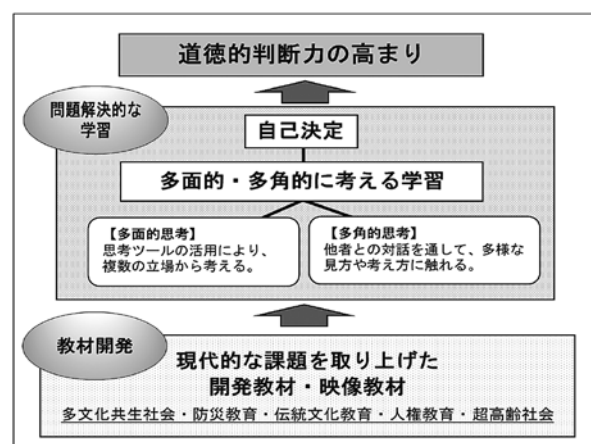


図 研究の全体構造

3 研究のまとめ

「道徳性アセスメントHUMAN」を用いた分析の結果、様々な問題場面において周囲のことを考え、どのように対処するかを道徳的に判断する力が高まったことが分かった。問題解決的な学習や思考ツールを用いた指導の工夫が多面的・多角的に考える力を伸ばし、道徳的判断力を高めることができた。なお、開発教材及び指導案等は、センターWebサイト「wakaba」からダウンロードが可能である。

目的に応じて表現方法を選択できるようにする ための「比例と反比例」の指導 —題材の精選、ふきだしの活用、伝え合う活動に着目して—

流山市立南部中学校教諭（前流山市立常盤松中学校教諭）

あさぬま 浅沼 かつとし 克俊



1 はじめに

本校の生徒は、知識や技能の定着は図れているが、表、式、グラフの特徴やよさを理解すること、特に表を用いて問題を解決することに課題が見られた。そこで、これらの表現方法を目的に応じて使い分けられるようにしたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の実際

(1)題材の工夫と精選

第1学年「比例と反比例」において、表現方法の特徴やよさを実感できる題材を授業に取り入れた。ある変域には増減がない問題（図1左上）に取り組ませることで、生徒は変化の様子を数値で確認できる表や、全体の傾向が一目でわかるグラフのよさに気付くことができた。

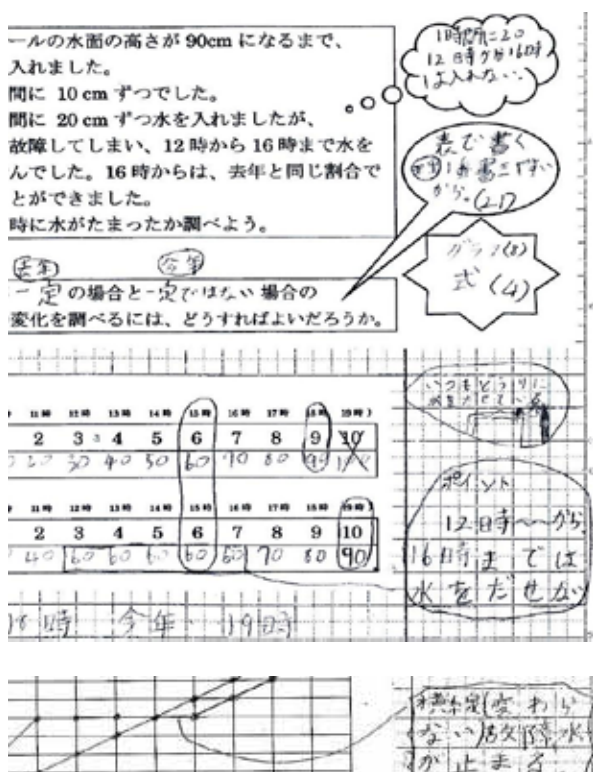


図1

(2)伝え合う活動の工夫

問題のイメージや疑問、自分の考えや他者の考えを表出する手立てとして、ふきだしを活用した。ふきだしの形式は「問題の理解」、「自分の考え」、「他者の考え」で区別した。（図2～4）

ふきだしに端的に表すことによって、生徒は自分の考えの変容や

他者の考えのよさを確認することができた。また、問題文や、表、グラフの対応する部分と結び付けることで、お互いに説明することが容易になり、伝え合う活動がより活性化した。単元の後半では、要点を簡潔にまとめ、他者の考えに対する自分の考えも記述できるようになった。

3 研究のまとめ

題材の工夫と精選により、問題から求めたいものと表現方法に対応付けられるようになり、表現方法のよさや特徴についての理解が深まった。ふきだしを活用した伝え合いが、自他の思考を振り返り、用いる表現方法の選択肢を広げることにつながった。今後は、今回得た成果を他領域での学習に生かすとともに、ふきだしの活用を含め、生徒同士が、より一層活発な意見交換ができるように指導法を工夫したい。

詳細は、総合教育センターのWebページをご覧ください。



図2 問題の理解で書くふきだし



図3 自分の考えを書くふきだし

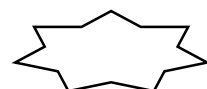


図4 他者の考えを書くふきだし

高等学校における国際理解を視野に入れたアジアの諸民族の音楽についての教材化に関する研究 —生徒の実感を伴った音楽体験を目指して—



県立茂原高等学校教諭（前県立千葉商業高等学校教諭） いわがみ まゆみ 岩上 真弓

1 はじめに

世界に広く存在している民族音楽には、その土地の風土、歴史、人々の生活や習慣が色濃く映し出されている。本研究は、アジアの諸民族の音楽についての学習を通して、文化の違いを理解し、尊重する態度を育てることを目指した。そのために、以下の2点を踏まえて、学習過程を構築した。(1)歴史的・文化的背景についての学習を取り入れる。(2)体験活動を通して、実感をもって音楽の特徴を捉えられるようにする。

2 研究の実際

(1)歴史的・文化的背景の学習

はじめに、アジアを中心に世界の諸民族の音楽を鑑賞した。^{さんしん ひかりき}三線、^{しのかん}箏、^{しのかん}篠笛、ティンシャ、中国笛などは実物を用意し、音色を聴かせることで、それぞれの楽器や音の特徴を考えることができた。

次に、シルクロードについて学習した。生徒は、交易路を通して音楽が繋がっていること、歴史と深いつながりがあることに気付くことができた。

(2)月琴の演奏、歌唱「茉莉花」

月琴は東アジアの弦楽器で、中国の宋代以降、^{みんしんがく}明清楽で使用され、日本伝来は江戸時代である。明治中期には庶民の間でも流行し、琉球でも演奏されていた。



授業で生徒は、100年以上前の実際の楽器を演奏した。初めて手に取る貴重な楽器を演奏することで、楽器の素材や形状、音色や演奏の仕方等について、既知の

楽器との共通点や相違点を考えることができた。チューニングや取扱いの難しさをあげる声もあったが、「神秘的な印象のある音色だった。」「沖縄の音楽を弾きたい気分になった。」「ウクレレやギターと違う響きをしていて文化を身近に感じることができた。」等、音の響きを味わい、音色の特徴を感じ取り、文化の違いやつながりに想像力を働かせることができた。

最後に、月琴の伴奏に合わせて「茉莉花」を歌った。「茉莉花」は中国で親しまれてきた代表的な曲で、旋律と中国語の特徴を味わいながら表現活動を行うことができる。生徒は、歌唱と月琴の演奏に分かれて練習した。練習後は、「^{いんとう}韻頭」の数字譜に付された中国語の読み仮名を、口唱歌で歌う生徒も見られた。歌詞の内容を踏まえ、中国語の雰囲気も味わうことができた。

3 おわりに

授業後、生徒からは「船や飛行機が発達していない時代でも、世界は道でつながっていて、楽器にもそれが表れている。」「歴史の流れとともに音楽のことが学べて良かった。」といった声が聞かれた。鑑賞、器楽演奏を通して、生徒は、アジアの音楽の特徴やイメージを実感することができた。

また、「音楽を通して世界が分かることってすごくいいな。」という生徒も見られた。「音楽に国境はない。」と言われるように、私たちは日常様々な音楽に触れることができる。生徒が実感を伴って民族音楽に親しむことで、それぞれの文化の違いを理解することができた。また、文化のつながりを考えることが、お互いの文化を尊重する態度を育成する一助となることが分かった。

学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の導入と課題について



和洋女子大学特任教授 しばない やすし 柴内 靖

県内のある小学校では、次年度以降に学校運営協議会を設置したコミュニティ・スクールにすることを検討しており、当該校の教職員に対して、意見聴取することとなった。

まずは、教育委員会から企画委員会の場において、学校運営協議会の設置の意義とその役割についての概要説明を受け、教職員からの意見を求めた。

教職員からは、主として①学校運営に地域住民の意見が入り、混乱するのではないか②教職員の任用に関する意見については、不安がある③学校運営に関して様々な意見が出され多忙化するのではないかなど、導入に際しての取組の不明確さや任用面での精神的な不安からコミュニティ・スクール導入に対する消極的意見が出された。

そこで、学校として、既に導入している学校の成果・課題を確認し、更に検討することとなった。

【関係法令】

地方教育行政の組織及び運営に関する法律第47条の5第1項

教育委員会は、教育委員会規則で定めるところにより、その所管に属する学校ごとに、当該学校の運営及び当該運営への必要な支援に関して協議する機関として、学校運営協議会を置くように努めなければならない。

ワンポイントレッスン

地方教育行政の組織及び運営に関する法律（以下、地教行法）で規定された学校運営協議会が設置された学校のことをコミュニティ・スクールと呼ぶ。文部科学省によれば、平成

30年4月1日現在の全国で学校運営協議会を設置している学校は、5,432校で、公立学校の14.7%がコミュニティ・スクールとなっている。

そこで、コミュニティ・スクールについて、基本的なことを押さえておきたい。

1 これまでの経緯について

2000年12月に、教育改革国民会議において、「教育改革国民会議報告～教育を変える17の提案」が出され、「新しいタイプの学校（コミュニティ・スクール等）の設置を促進する」ことが打ち出された。その後、総合規制改革会議や中央教育審議会等で議論され、「保護者や地域住民が一定の権限を持って、運営に参画する新しいタイプの公立学校を設置する方向となり、地方教育行政の組織及び運営に関する法律が改正され、平成16年9月から正式に導入された。

2015年、中央教育審議会答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」を踏まえ、学校運営協議会の役割などが見直された。

2017年3月、地教行法が改正され、学校運営協議会の設置が努力義務化された。

2 学校運営協議会制度の概要とは

保護者や地域住民が学校運営に参画する学校運営協議会制度の導入により、地域の力を学校運営に生かす「地域とともにある学校づくり」を推進し、これにより子供たちが抱える課題を地域ぐるみで解決する仕組みを構築し、質の高い学校教育を推進することを目指す

している。

学校運営協議会の委員は、①地域住民②保護者③社会教育法9条の7第1項に規定する地域学校協働活動推進員、その他の対象学校の運営に資する活動を行う者④その他当該教育委員会が必要と認める者について、教育委員会が任命することとなっている。

3 学校運営協議会の主な役割とは

教育委員会が学校運営協議会を置く学校を指定し、①校長の作成する学校運営の基本方針を承認すること（必須）②学校運営について、教育委員会又は校長に意見を出すことができること（任意）③教職員の任用に関して、教育委員会に意見を出すことができること（任意）である。

4 本ケースから考えること

コミュニティ・スクールの導入については、原則、学校が宣言するのではなく、教育委員会が指定することとなるが、本ケースでは導入に当たり当該校の教職員に事前に概要説明や意見聴取を行い、その目的や概要、期待される教育効果等の説明を行うとともに、実際に教育実践を行う教職員の不安感等の軽減に努めている。

更に、教職員から疑問点や不安点を出し合うとともに、既に導入された学校の成果と課題に基づき、導入された場合の取組や成果等について慎重に検討しようとしている点は重要な過程である。

ここで大事なことは、単に、新たな時代に即した新しいタイプの学校としてコミュニティ・スクールを導入することではなく、導入に当たり、その背景や意義、新たな取組による教育的効果をきちんと検討するステップをとることと、学校運営協議会からの学校運営に関する意見を基に、教育を推進する主体である教職員の意識改革を図ることである。

5 コミュニティ・スクール指定校の成果と課題

導入に際して、当該校の教職員からは、前

述したとおり、教職員の任用に関する意見への不安や学校運営に対する意見・要望への対応による多忙化などの意見が出されているが、既に導入されている学校においても、同様の意見が出されている。

文部科学省の委託調査研究報告書や各コミュニティ・スクールの研究報告を調べみると、成果としては、①学校と地域が情報を共有化するようになった②地域と連携した取組が組織的に行われるようになった③学校に対する保護者や地域の理解が高まった④地域の教育力が高まった⑤児童生徒の学習意欲が高まった⑥保護者や地域の苦情が減ったなどであった。

一方、課題としては、①導入当初の組織作りや学校運営協議会からの学校運営に関する意見や要望に応えるための労力の増加②地域の協力・支援者の増加に伴うコーディネートの問題③人事の面や無理な要求の増加が見られた。

6 おわりに

学校運営協議会は、校長の作成する学校運営の基本方針や予算等の承認、教職員任用に関する意見を、教育委員会に申し出る権限を有している。導入した学校の状況を見ると、建設的な意見や要望がほとんどであり、特定教員の人事要望よりも、教育効果を上げるための配置要望が主であることを考えると、保護者や地域の方の支援を大きく得られるものとして捉えたい。

この制度の導入は、児童生徒や地域等の実態を踏まえ、保護者や地域の方の支援を受けながら、「学校を中心とした新しい地域の創造」を図るという意味も大きい。

最後に、様々な課題を抱えながら、日々児童生徒の教育的効果を第一に考え実践している教職員に敬意を表したい。

幼児期から中学までを見通して子供を育てる 「チーム日の出」の取組



浦安市立日の出幼稚園長 なかじま まみこ 中島 麻美子

1 はじめに

浦安市は、家庭や地域と連携し、幼児期から小・中学校へ学びと育ちをつなぐため、就学前から義務教育9年間を見通した教育活動を推進している。「幼保小中連携・一貫教育グランドデザイン」を基に、各中学校区の特色を生かした連携事業を展開している。

当園は今年度で33年目を迎える。市内では新しい地域であるが、幼保小中相互の交流活動が定着しており、浦安市教育委員会より「浦安市幼保小中連携教育教科推進校（道德）」の指定を受けている（4年次）。

2 日の出中学校区の連携について

(1)園児・児童の交流

① 保育園との交流（年4回）

互いの園に行き、ふれあい遊びやリレーをしたり、幼稚園児が乳児のお昼寝の寝かしつけを体験させてもらったりしている。互いに園児数が少ないので、良い刺激となっている。

② 学校との交流（年5回）

1回目：5年生が幼稚園（保育園）に来て、園の様子を知ってもらい、グループで自己紹介をする。2回目以降：園児が小学校へ行き、校内を案内してもらったり、一緒に遊んだりする。3学期には給食やミニ授業を体験したり、5年生が自作の教材で勉強を



教えてくれたりすることで、1年生になる期待や、顔見知りの小学生や先生がいることから安心感をもつようになっていく。

(2)施設・作品等を通じた交流

夏はプール、冬は校庭を借りての風揚げや、幼保小で作品を展示し合う「ミニ作品展」を行っている。また、中学校の花壇を借りてジャガイモやサツマイモを栽培している。

(3)教職員同士の交流と連携

①保育・授業の相互参観

小学校の研究授業や「浦安市幼保小中連携の日」の合同研修会に参加し、教員同士の意見交換をしている。また、小学校の先生が保育を見に来ることで、幼児期の発達や学びを知ってもらう機会となっている。

②管理職や事務局レベルの連携会議

担任同士の連絡以外にも、校長・園長会議や教頭・副園長・主任教諭による事務局会議で、綿密な連絡を取り合っている。

3 おわりに

改まった交流活動だけでなく、教師同士で連絡を取り合い、すぐに実現できることが本来の「連携」であろう。例として、運動会前に小学生に走り方を教えてもらったり、音楽会前に中学校の教頭先生に歌唱指導をしていただいたりしている。こうした小さな交流の積み重ねにより、園児が小学生に憧れをもったり、学校の先生に親しみを感じたりすることにつながっている。また、活動後の評価を“振り返りシート”で連絡し合うことで、次回に生きる連携となっている。今後も互惠性のある連携となるよう努めていきたい。

小学校プログラミング教育コンテンツの紹介 ～授業プラン6 3年国語「へんとつくり」～

県総合教育センターカリキュラム開発部メディア教育担当

1 はじめに

県総合教育センターで作成した小学校プログラミング教育用コンテンツ授業プラン6を紹介する。

小学校3年国語において「Viscuit」を活用し、「小学校プログラミング教育の手引（第三版）」のB分類（学習指導要領には例示されていないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの）に該当する授業プランである。

2 授業プラン6の紹介

(1)ソフトウェアViscuitを使用



【Viscuitによる動く絵作り】

「Viscuit」は無償で公開されているビジュアル型プログラミング言語である。コンピュータを使って自分たちで描いた絵を簡単な命令に従って動かすことができる。描いた絵を左右に配置し（その見た目から「眼鏡」と呼ばれる）、状態の変化を示すことでプログラミングを行う。パソコンだけでなくタブレット端末やスマートフォンでも使用できるのが特徴である。

(2)内容

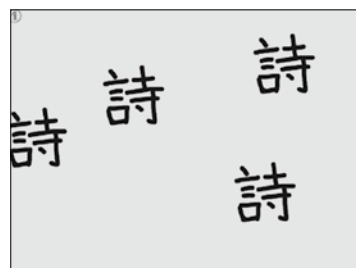
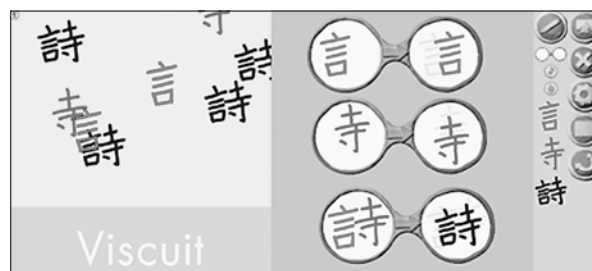
①学年・教科・単元名・学習問題

小3・国語・「へんとつくり」

「へんとつくりを正しく組み合わせてかん字をつくろう」

②主な学習活動

これまでに習った漢字の「へん」と「つくり」の中から組み合わせると漢字になるものを選び、「へん」と「つくり」が組み合わせると漢字ができるアニメーションを作成する。



眼鏡の字の位置を調整すると、画面上で「へん」と「つくり」がそれぞれ一定方向に動くようになり、

丁度よいタイミングでぶつかると漢字に変化するプログラムである。友達が途中まで作成したプログラムの続きを作っていくという活動を取り入れることで、自分が気付かなかった漢字に気付いたり、漢字への興味を高めたりすることができる。さらに、漢字は「へん」と「つくり」の組み合わせによって構成されているということを理解できる活動である。

3 おわりに

本センターのWebサイトから学習指導案・提示用PowerPoint・ワークシート・デモ映像等がダウンロードできるので、ぜひ活用していただきたい。

<https://www.ice.or.jp/nc/>



次世代を担う子供たちの育成を目指して ～新しくなった学力向上プラン～

県教育庁教育振興部学習指導課

1 千葉県教育を取り巻く現状

(1)新学習指導要領の全面实施

今回の学習指導要領改訂は、Society5.0時代の到来を見据えた、今後10年間の我が国の社会を展望して改訂されており、今までの改訂よりも大きな変更となっている。

特に、これからの学校においては、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現により、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開するとともに、すべての教科等で育成する資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つとして、一人一人に生きる力を確実に育むことが求められることとなった。

(2)千葉県における教育施策

千葉県においても、令和2年2月に「次世代へ光り輝く『教育立県ちば』プラン」を策定した。

学力向上施策に關しては、施策1「人生を主体的に切り拓くための学びの確立」の中に、「ちばっ子『学力向上』総合プランの策定」が示された。

「ちばっ子『学力向上』総合プラン」については、平成23年度から昨年度まで「ちばっ子『学力向上』総合プラン（ファイブ・アクション）」として

取り組んできたが、ここまで述べてきた教育の現状を踏まえ、令和2年度から、新しい総合プランを策定し、学力向上に取り組んでいくことになった。以下に、新しい総合プランについて述べる。

2 新しい総合プランの策定

(1)概要

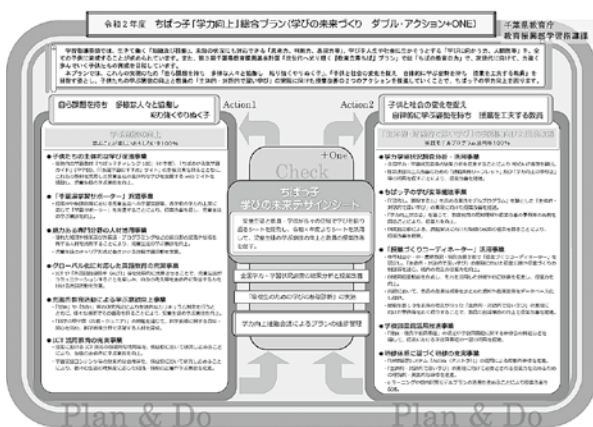
令和2年度から、第3期千葉県教育振興基本計画の実現を目指し、新学習指導要領が求める「生きて働く『知識及び技能』」、「未知の状況にも対応できる『思考力、判断力、表現力等』」、「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力、表現力等』」を千葉県のすべての児童生徒に育成することを目的に、「ちばっ子『学力向上』総合プラン（学びの未来づくり ダブル・アクション＋ONE）」として、新たにスタートした。

旧プランは五つのActionと29の事業で構築されていたが、新プランでは、二つのActionと11の事業に再構築した。

Action 1 では児童生徒の育成に、Action 2では教員の指導力向上に重点を置いて構成している。

さらに＋ONE（プラス・ワン）として、「ちばっ子『学びの未来デザインシート』」事業に取り組む。以下、それぞれの概要について述べる。





新プランの事業一覧（※）

(2) Action 1 「自ら課題を持ち 多様な人々と協働し 粘り強くやりぬく子」

Action 1 は、「子供の学ぶ意欲の向上」の実現を支援する六つの事業で構成した。

- ①子供たちの主体的な学びの促進事業
- ②千葉県学習サポーター派遣事業
- ③魅力ある専門分野の人材活用事業
- ④グローバル化に対応した英語教育の充実事業
- ⑤先進的教育活動による学ぶ意欲向上事業
- ⑥ICT活用教育の充実事業

(3) Action 2 「子供と社会の変化を捉え 自律的に学ぶ姿勢を持ち 授業を工夫する教員」

Action 2 は教員の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の実現を支援する五つの事業で構成した。

- ①学力学習状況調査分析・活用事業
- ②ちばっ子の学び変革推進事業
- ③「授業づくりコーディネーター」活用事業
- ④学校図書館活用推進事業
- ⑤研修体系に基づく研修の充実事業

(4)+ ONE (プラス・ワン) 「ちばっ子学びの未来デザインシート」

+ ONE (プラス・ワン) では、PDCAサイクルのCheckの過程を担う事業で構成されており、全国学力・学習状況調査の結果分析や学力向上推進会議による各事業の進捗管理と評価などの事業に取り組む。

その中でも、子供たちと教員等がそれぞれの学びを振り返り、「子供たちの学ぶ意欲の向上と教員の授業改善を促す」ことができる調査問題（デザインシート）や評価システムの開発を行う「ちばっ子『学びのデザインシート』事業」に新規に取り組む。

これは県内の小学3年生～中学3年生を対象に、当該学年の2学期までの学習内容や能力を活用して、身近にある具体的な文脈で作成された課題を解決できるかを問う学力調査を実施することを想定しており、学んだ知識をどれだけ覚えているかというような学力調査とは異なるものを目指している。

スケジュールとしては、令和4年度から正式に実施するための準備を今年度から進める。

3 おわりに

変化の激しいこれからの時代を担う子供たちと、新しい教育内容に対応した教員の育成に向けて「ちばっ子『学力向上』総合プラン」を策定した。

先生方においては、教育立県ちばの推進に向けて、この総合プランを積極的に活用していただきたい。

※千葉県教育委員会 Web サイト

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/shidou/gakuryoku/2019/sougoupuran/r2gakuryokukoujyousougoupuran.html>

県立関宿城博物館25周年記念企画展 「関東のへそ～地勢とくらしのヒストリー～」

県立関宿城博物館

関宿は関東平野と関東地方の真ん中付近にある。また河川も集中しており、文字どおり「へそ」のように低い場所である。縄文時代には海進により、東京湾が関宿付近まで広がっていた。その後、海が後退しても河川の脇に米作りに適さない北総台地があり、農地の開発が進まないという特徴があった。

日本の交通事情は、河川も含め、水陸両面で発達した。古代から関宿の東側には、常陸川から細長い谷に沿って手賀沼、印旛沼、霞ヶ浦を巻き込んだ香取海^{かとりのかみ}という大きな内海が銚子に向けて広がっていた。また西側には太日川^{ふとひがわ}が流れ、その先には武蔵国があった。香取海は、香取神宮を中心に流通が盛んで、近くを古代の官道が通り、栄えていた。中世半ばには、東武蔵を経て下総、上総、常陸への道ができ、関宿周辺も人の行き来が多くなる。

中世に登場する武士団は、町場と交通網を作り、自身の所領の水田の改良や新たな農業技術の導入により生産性を上げていった。関宿は下総国葛飾郡下河辺荘庄内領^{しもこうべのしょうしょうないりょう}に属し、下河辺氏が古河・水海^{みずうみ}・関宿に拠点をおく。その後、水海と関宿に水運を熟知した領主・築田氏^{やなだ}が入り、室町時代中期、足利成氏が古河公方として古河に移り住んだ。

関宿は古河と目と鼻の先にあり、利根川、太日川と常陸川が最も近づく場所で、水陸両交通を持ち、防衛の拠点として重要な場所だった。「一国に匹敵する」と賞され、一躍歴史の表舞台に登場する。まさしく、河川が行き交う「へそ」の土地であるが故である。

関宿が重要な場所であることは、近世になっても変わらない。関宿藩に譜代大名がおかれ、

人為的な地勢変化である利根川東遷によって関所や街道がつくられ、関宿は流通、防衛、商業の面から発展を遂げていく。舟運が開け、江戸と関東内陸部・奥州との物資の輸送が盛んになった。利根川周辺では、江戸に近い地の利を生かし、醸造業なども興った。

しかし一方で、この東遷は関宿周辺を水害常襲地帯にし、そのため、水防施設である水塚^{みづか}が多く造られることになる。

近代以後は、都市部を中心に西欧技術による町づくりが進み、地勢に直接関わった生活や職業の形態が縮小していく。関宿は舟運で栄えた場所で、猿島茶^{さしまちや}の輸出がうまくいかなかったこともあり、鉄道の敷設がなかった。また明治政府が水害対策を主にした河川法を制定したため、舟運は徐々に衰退し、農村地帯になっていく。しかし関東西部や千葉県南部に比べると農地に利用されていない土地も多かったため、高度経済成長期以降の高速道路の整備で、関宿周辺にも近年圏央道が通り、工業団地等が増えている状況である。これもまた地勢との深い関わりといえよう。



猿島茶の風景（茨城県境町）

近代では公害問題、現代では環境問題がクローズアップされ、地勢から離れたくらしになって以降、自然に背を向けたつけが、訪れている感がある。関宿周辺では、いまだ豊かな自然が残っている。地勢と歴史の流れに深く関わってくらしを発展させてきた関宿が、今後どうなるのか、興味深い。詳しくは、

<http://www2.chiba-muse.or.jp/SEKIYADO/>

千葉県児童生徒・教職員科学作品展から全国展へ

県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育担当

県総合教育センターでは、「千葉県児童生徒・教職員科学作品展」を実施し、特に優秀な作品を全国展に出品しています。

令和元年度の全国展では、千葉県から出展された作品が数多く特別賞に輝きました。その中からいくつかを紹介します。

★第56回全国児童才能開発コンテスト科学部門

・中央審査会委員長賞

「オオバコはふまれたいのか

ー2つの観察と2つの実験でオオバコの生き方にせまるー」

いすみ市立夷隅小学校 6年 藤平 結生

審査評

着想が新しく、ふみつけ板を使った実験の客観性、再現性が高い。地域の人口増減と関連付けた考察も大変よくまとまっている。

・財団科学賞

「女王アリの観察パート5 !!

・いままでのなぞが明かされる !!

・複数の女王アリが協力する子育て」

松戸市立小金小学校 5年 稲村 拓哉

審査評

仮説を立て、検証する手順がしっかりとしている。自分の観察から考えを組み立てることができている。

「フウセンカズラのひみつ パート6」

千葉市立真砂西小学校 6年 樋口 梁果

審査評

両性花と雄花の存在理由を明らかにし、わかりやすくまとめている。これまで6年間にわたって続けてきた研究の集大成となっている。

★第63回日本学生科学賞

・入選3等

「そんなバナナ!? パート2

～バナナを甘くする方法～」

千葉市立緑が丘中学校 2年 宮坂 直太郎

宮坂 賀子

審査評

バナナの糖度、塩分、pH、細胞の大きさ、食物繊維の変化など様々な視点から実験を行い、丁寧にデータをとって研究されている。

★第78回全日本学生児童発明くふう展

・特許庁長官賞 「未来のランドセル」

柏市立手賀東小学校 4年

ヴァイフウィングル リアム 漸

審査評

プログラミングを生活に有効的に活用している作品である。プログラムのアルゴリズム

もよく思考されている正に未来の作品である。
※他にも千葉県から20人の児童生徒が入賞した。

詳しくは県総合教育センターWebサイト「優秀作品選集」を御覧いただきたい。

令和2年度千葉県児童生徒・教職員科学作品展は、科学論文の部（高等学校の部）のみの開催となる。10月19日（月）県総合教育センターで一般公開される予定である。

※**審査評**は「優秀作品選集」のものを抜粋。



道徳教育を楽しむ

長生村立八積小学校

1 はじめに

社会のグローバル化が進み多様な文化や価値観がもたらされるようになった現在、学校には「生きる力を育む」ことの実現のために具体的な手立てを図ることが喫緊の課題となっている。特に人々がお互いの良さや違いを認め合い、尊重し合いながら生きていくことが大切となっており、規範意識、自己肯定感、社会参画意識の低下やいじめ問題等の解決が求められている。本校では、これらの課題に対応しようと、「特別の教科 道徳」を研究している。具体的には、道徳の授業を要とし、道徳的価値についての理解を基に自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え議論する授業を創造しようと試行錯誤しながらも着実に進めている。

児童がよりよく生きるための道徳性が養われ、さらに道徳的实践力をつけ将来にわたって生きる力につながるように推進したい。

2 研究の目標

「考え議論する道徳」において児童が多面的・多角的に考え、生き方についての考えを深める指導方法の工夫改善を図れば道徳的価値を深めることになることを、実践を通して明らかにする。道徳教育の視点で学校教育活動全体をひと磨きする。

3 取組の重点

(1)考え議論する道徳授業の指導方法の研究

①講師の指導による指導方法の工夫・改善

②仮説の検証としての授業研究

(2)他教科との関連

①各教科における道徳教育の工夫・改善

※道徳的な視点で各教科をひと磨きし実践する。

(3)地域との連携

①ゲストティーチャーの効果的な活用

②道徳授業の地域公開

4 研究の実践

(1)3学年（道徳の授業実践）

相互理解、寛容（内容項目 B-10）

教材名 「日曜日の公園で」（光村図書）

①主題名 相手の意見も大切に



②授業後の考察

タクとぼくの言い争いの場面を取り上げ、どうすれば良かったのかを考えさせた。ワークシートには自分を重ね合わせて記入している様子が見られた。記入後、役割演技を行うことで演じた児童だけでなくそれを見ていた児童もいろいろな見方や考え方があることを学ぶことができ、相手の言い分を理解し譲り合うことや異なる意見にも耳を傾けることの

大切さに気付くことができた。また、役割演技を行うことについての重要性を共有することができた。

③地域との連携

授業を行うにあたり、指導主事を要請し教職員を三つのグループに分け、主発問をどうするか等、活発に討論した。この討論も「考え議論する道徳」といえ、次第に定着してきた。これによって自信をもって指導することができた。また、保護者や地域の方々に理解を求めるためにも積極的に公開した。

(2)道徳教育と各教科との関連

道徳教育は、特別の教科である道徳を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科は、もとより各教科（外国語活動）、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達段階を考慮して適切な指導を行う必要がある。よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うために特色ある教育活動を数多く行った。その中でも中国の小学生との交流は、心の教育の推進として、とても有意義なものとなった。

①中国の小学生との交流

中国の小学校と2度、交流する機会を得た。

それぞれの学校の発表をした後にゲームやインタビューを行い、その後給食も一緒に食べた。お互いに文化の違い等に戸惑いながらも楽しく交流をすることができた。特に中国の子供が給食時に牛乳ビンのふたを開けられないのを見て本校児童がふたを開けてあげる思いやりのある行動を見ることができた。

②幼児、高齢者等とのとの触れ合い

学校行事において、より良い人間関係の形成、公德心、社会奉仕等に関わる道徳性を養おうと幼児、高齢者や障がいのある人々との触れ合い活動を行った。写真は、6年生が地域の方と一緒に独居老人宅を訪問する様子で

ある。その他の活動として4年生の車いす体験、5年生の障がい者施設訪問を行った。コミュニケーション能力や豊かな人間性も育むことができ、地域への貢献活動となっている。



(3)地域との連携

本校では、一人一回地域へ授業公開を行っている。地域の議員や学校評議員等を含め、たくさんの方々の参観があった。公開に向け、あいさつ運動等の充実も図った。また、地域の方を講師として積極的に招聘している。

5 おわりに

本校では道徳教育推進委員会を設置し、定期的に話し合い、改善してきた。また、各教科と道徳の内容がわかるための全体計画を作成し、様々な取組を行ってきた。

道徳の授業を行う際の職員研修では、主発問を積極的に「考え議論する」ことができるようになり、とても有意義な研修となった。

こういった活動の成果として教員が自信をもって児童を指導することができていることは学校経営にとっても大きな成果である。

今後は、自校の道徳教育の推進について、更に保護者や地域の方に理解を求め、学校と家庭・地域が連携した指導を進めることができるようにしたい。また、自分を大切にし、他人を大切にする児童を育てるため、校長としてリーダーシップを発揮し、これからも道徳教育を強く推進していきたい。

「個に応じる指導」と「個別最適化された学び」

千葉大学教育学部特任教授 ^{あまがさ しげる} 天笠 茂

1 「個に応じる指導」をめぐって

第一線を間もなく退かれようとする世代の方々の中で、『小学校教育課程一般指導資料Ⅲ－個人差に応じる学習指導事例集－』と称する“指導資料”が文部省（当時）より発刊されたことについて記憶はいかがであろうか。1984（昭和59）年12月10日付けとある。

本書は、「ゆとりと充実」や学校裁量の時間などを掲げた1977（昭和52）年告示の学習指導要領の実施のためにまとめられた三つの指導書のうちの一つである。個を理解し、個に応じることへの基本的な考え方が説かれ、24の事例が収められている。

当時、指導の個別化・個性化とか、個に応じることが言われ始めた時代である。先進校の取組も注目を集め、このテーマに文部省も向き合ったとして事例集に多くの関心が寄せられた。ある意味、「個に応じる指導」に関わる教育課程行政は、この事例集が一つの転機をもたらしたといっても過言ではない。

その「個に応じる指導」が、一つの用語として学習指導要領総則の配慮事項に取り上げられるのは1989（平成元）年改訂からであり、その後、引き継がれていく。

2003（平成15）年の一部改正では、1998（平成10）年改訂で「個に応じる指導」の例とした個別指導、グループ別指導、繰り返し指導、教師による協力的な指導に加えて、学習内容の習熟に応じた指導、興味・関心に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導、などが示された。

そして、2008（平成20）年改訂の学習指導要領へと継承された。

そのような経過を経て、このたびの改訂に至り、「個に応じる指導」は新たな局面を迎えることになった。これまであった配慮事項も「個に応じる指導」も学習指導要領からは消えたものの、それは、「個に応じる指導」の後退を意味するものではなく、総則の抜本的な見直しに伴う学習指導要領上の位置付け、及び、その構造的な転換によるものであった。

新たに登場した「主体的・対話的で深い学び」を支え実質化を図るのが「個に応じる指導」に関わるノウハウであり、その意味で、両者は通底しているとも言える。まさに、「個に応じる指導」は、「主体的・対話的で深い学び」において、全面的に展開を図る場を得たとみることができる。

2 「個別最適化された学び」ということ

一方、現在、Society5.0時代に求められる資質・能力の育成のためとして、新しい学習指導要領の着実な実施、先端技術の効果的な活用、その一環としてGIGAスクール構想などが打ち出されている。その際、掲げられたフレーズが、「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」である。

文科省内に設置された「Society5.0に向けた人材育成に関わる大臣懇談会」において、2018（平成30）年、6月5日、「Society5.0に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」とのテーマの下、Society5.0時代にお

ける学校や学びについて、次のような意見交換がなされた。

まずは、学校の現状を“一斉一律授業の学校”としてとらえ、これを“個人の進度や能力、関心に応じた学びの場”に変えていく必要がある。また、“同一学年集団の学習”については、“学習到達度や学習課題等に応じた異年齢・異学年集団での協働学習の拡大”を図る必要があり、さらに、“教室での学習”では、“大学、研究機関、企業、NPO、教育文化スポーツ施設等も活用した多様な学習プログラム”が学習支援の一環として求められる。

これらの具体化には、一単位時間をはじめ日課表や週時程の時間設計や運用の見直しが問われることになる。ただ、学年の枠組みに手をつけることに慎重な現状をどこまで乗り越えられるか。更に、教育内容を学年ごとに示す学習指導要領の在り方が問われることになる。

「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」は、これらの課題の克服を通して学校や教室の学びの変革を目指す象徴的なフレーズとされたわけである。

「個別最適化された学び」は、学習者の興味や関心、経験や性格、学習速度、学習方法などに応じることが、また、学習者自身による学ぶ方法の選択や学び直しが強調される。

それは、「個に応じる指導」の下に学びの在り方を追究してきた取組と符合するところも少なくなく、親和性をもったものとしてとらえることができる。ただし、「個に応じる指導」は、一斉授業の改善を意識しつつ、現行の組織や制度の枠組みを前提に取組がなされてきたのに対し、「個別最適化された学び」は、学びの変革に向けてICT環境の整備を意識しつつ、組織や制度の見直しもためらわない志向性を有している。すなわち、「個別最

適化された学び」は、「個に応じる指導」の流れを汲みつつも、方法上の工夫・改善にとどまらず、制度的改変を含む局面の展開を目指している点にも注目したい。

3 学校として授業改善への三つのステップ

そこで、学校として「個別最適化された学び」に向けた見通し、すなわち経営戦略について、一斉授業の改善に向けた三つのステップとして描いておきたい。

第1のステップは、一斉授業の中で個に応じ、個を生かす工夫である。はじめに紹介した事例集も、ねらいは一斉授業の改善にあったわけで、収録された事例の多くが、その工夫の紹介にあったことから明らかである。まずは、個に応じる観点から、一斉授業の改善に努めることを学校の授業改善の基盤づくりとして位置付けたい。

第2のステップは、「個に応じる指導」として蓄積されてきたノウハウの学習と、子供や学校の実態に応じた活用である。様々になされてきた取組の中のどのような手法が、わが校の子供たちの実態に即しているか、それを診断し、活用を図ることである。

第3ステップは、「個別最適化された学び」への取組である。まずは、「個別最適化された学び」のイメージづくりであり、それは、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が目指す学習の在り方と多分に重なる。学習者が、知識を関連付けて深く理解したり、考えを形成したり、自分なりに課題を見付けて解決に取り組んだり、主体的に学ぶ過程を重視する学びの実現を目指す。そのような学びを生み出すために、学校の組織や制度の柔軟な運用や見直しをも視野に収めつつ、学習の内容や方法の開発が求められることになる。

特別支援教育講演会のお知らせ 「障害者とともに生きる」ー地域共生社会を目指してー

県総合教育センター特別支援教育部

1 はじめに

特別支援教育講演会（以下、本講演会）は、特別支援教育における今日的課題を取り上げ、その理解や対応等について学ぶことで教職員の資質・能力の向上等を図るものであり、併せて、県民に対し、特別支援教育に関する啓発を図ることも意図している。

2 今年度の取組

障害者差別解消法施行から4年、差別的取扱いの禁止や合理的配慮の提供など、広く社会に定着しつつある。

また、障害のある人の人権、障害のある人もない人もともに暮らしやすい街・地域づくりがクローズアップされ、教育においては、インクルーシブ教育、特別支援教育の推進等、個々の児童生徒の実態や特性等に応じた取組を適切に進めることが求められている。

本年度は、本講演会のテーマを「障害者とともに生きる」ー地域共生社会を目指してーとし、講師に野澤和弘氏をお招きする。

ダイバーシティ、多様性の尊重、地域共生社会の実現が強く望まれる中、本講演会を通して、「みんなが暮らしやすい豊かな社会」の在り方について、共に考えていきたい。

野澤氏の新聞記者・論説委員、国や千葉県など複数の自治体における様々な委員等の実践、更に、父親としての視点からの提言等から、多くのことを学べる機会と考える。

【講師：野澤 和弘 氏（略歴）】

1983年毎日新聞社入社。いじめ、引きこもり、薬害エイズ、児童虐待、障害者虐待などの問題に取り組む。2009年から2019年まで論説委員（社会保障担当）。

元千葉県障害者差別をなくすための研究会座長、社会保障審議会障害者部会委員、内閣府障害者政策委員会委員、厚生労働省今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会委員など。主な著書「あの夜、君が泣いたわけ」「条例のある街」「障害者のリアル×東大生のリアル」他。



【本講演会の開催期日、申込方法等】

○期 日 令和2年10月31日（土）

○時 間 午後1時30分～午後4時

○定 員 150名（受付：午後1時～）

○場 所 県総合教育センター 大ホール

○申込み 電話、メール、FAX（先着順）

※手話通訳等が必要な方は、申込みの際にお伝えください。

※メールでの申込みは、①氏名②所属③当日、連絡可能な電話番号を御記入ください。

※FAX申込み用紙は、Webサイトを御覧ください。（<https://www.ice.or.jp/nc/tokushi/>）

○締切り 10月19日（月）

○申込先 県総合教育センター特別支援教育部
T E L 043-207-6023

F A X 043-254-5111

E-mail sosetokusi@chiba-c.ed.jp

○『三密』に十分配慮し、開催します。

○検温やマスクの着用等の御協力をよろしくお願いします。



千葉歴史の散歩道

印旛郡酒々井町周辺の初期荘園の遺跡

千葉県教育庁教育振興部文化財課埋蔵文化財班長 **木原 高弘**



皇族や豪族が個別に土地・人民を支配する体制をやめて公地・公民とし、口分田を与える班田収授制をはじめとする律令制は奈良時代に確立した。しかし、8世紀半ばには早くも耕地の不足が生じ、朝廷によって耕地拡大の施策がとられ、743年の墾田永年私財法などによって、開墾地の私有が認められるようになる。その結果、大寺院や貴族は大規模な開墾を行い、荘園を所有するようになる。この奈良時代から平安時代前期（8～9世紀）に成立した荘園を初期荘園といい、その性格をもつ遺跡が印旛郡酒々井町周辺の高崎川流域において発見されている。

尾上木見津・駒詰遺跡は、東関東自動車道の酒々井インターチェンジ建設に伴い発掘調査され、廂が付いた大型の掘立柱建物などの荘園の管理施設とみられる建物群、官人が身に着けた帯金具や鉄製農具などが出土した祭祀跡が見つかっている。また、この遺跡から出土した二彩碗や三彩陶枕は、一般の集落ではほとんど出土しない希少な高級陶器で、中央の大寺院や貴族との関係を示している。

飯積原山遺跡は、酒々井プレミアムアウトレットが所在する土地地区画整理事業地の開発に伴い発掘調査された。集落全体が溝で区画され、掘立柱建物、竪穴住居が計画的に配置されている。最大の掘立柱建物群は官衙（役所）によく似た「口」の字状に建物が並んでおり、「三倉」と記された墨書土器が多数出土していることから、倉などが建つ管理施設と考えられる。よく似た

建物群は、国道51号と国道296号が交差する付近に位置した北押出し遺跡・本佐倉外宿遺跡でも見つかっている。

以上の遺跡は、荘園を示す「庄」のほか、「奈野」、「奈」の共通する墨書土器が出土していることから、所有者が同じ荘園の開発・経営拠点と思われる。

なぜこの地域に初期荘園が営まれたのか。初期荘園の開発・経営を行うための労働力を確保するには、地域の有力者の協力が必要である。佐倉市白銀地区の宅地開発事業に伴い発掘調査された高岡大山遺跡は、この地域の豪族であり、古代の下総国印旛郡を治めた郡司である「丈部直」氏の居所と推定されており、その協力を得やすい地であったからであろう。官衙・官人との関わりがうかがえる遺構・遺物が見つかっていることはそれを物語っている。

この地に初期荘園が存在したことは、文献史料には現われない、埋もれた歴史であり、地道な発掘調査の蓄積によって明らかになったことである。私たちの身近にある遺跡は、地域の歴史・文化を知るうえで欠かすことができない遺産なのである。



尾上木見津遺跡出土の二彩碗（酒々井町教育委員会提供）

千葉教育 萩 (No. 663) 令和2年9月3日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター（代表）櫻井 比呂樹
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204
URL <http://www.ice.or.jp/nc/>

印刷所 千葉市療育センター いずみの家
〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3 TEL 043-216-2465

次号予告

『千葉教育』 菊 (No.664)

◆特集 学校における児童虐待への対応とは

○シリーズ 現代の教育事情

山梨県立大学人間福祉学部長 西澤 哲
 文部科学省初等中等教育局児童生徒課
 県教育庁教育振興部児童生徒課
 県健康福祉部児童家庭課
 富津市教育委員会

○提言

鋸山美術館館長 鈴木 裕士

令和2年度 シリーズ 現代の教育事情

蓮 662号	千葉県にオリンピック・パラリンピックがやってくる！ ～「千葉県オリンピック・パラリンピックを活用した教育」の取組～
萩 663号	道德教育の充実に向けて
菊 664号	学校における児童虐待への対応とは
梅 665号	外国語教育・外国語活動の指導の在り方
菜 666号	これからの「教育の情報化」 ～1人1台端末の時代を迎えて～
桜 667号	読解力の向上へ向けた指導の在り方

「千葉教育」は千葉県総合教育センターの
Web サイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉県総合教育センター
公式 Twitter @Chiba_Sose



表紙写真について

柏市立柏第三小学校 「校内研究主題『活発な意見交流』のある授業を目指して
話し合い活動の様子（4年国語科）」